
世界で一番のヒーロー

Fumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で一番のヒーロー

【NZコード】

N8961A

【作者名】

Fumi

【あらすじ】

普通の高校生カイ。人より子供っぽくて、バカだ！しかし、仲間の事になると…命をかけて守る人はいますか？

第一話　秘密（前書き）

登場人物などは、実際のものとは一切関係ありません

第一話　秘密

五年前：

一つの極道集団と一つの極道集団が対立した。

一般人も巻き込み、警察や自衛隊など出動した。

人々は、『極道大戦争』と呼び、毎日恐怖に怯えていた。死者や重傷者も出た。

誰もが、諦めていた時、突然戦争は終わった。

1人の少年の手により2ヶ月も続いた悪夢は幕を閉じた。

その少年の事は、どこに誰なのかわからない。

それから、五年後人々は極道大戦争の記憶は薄れ、平和な日を送っていた…

「おっせ～なあ。」

「このままじゃ、遅刻決定だね」

朝早く、学校へ行くために毎日電車に乗つてゐる人がいる。髪は坊主頭で、体はがつちりして、周りからは怖いと言われてるリョウ。

顔はイケメンで体も筋肉が目立つ、スポーツ万能なタカシ。この二人は、市内の高校に通つてゐる高校一年生だ。

「カイ兄は、まだ来てないの？」

見た目は中学生っぽい可愛らしい男の子は、リョウ達よりも一個下のワタル。

電車が出発しようとするとき、1人の少年が走り込んで來た。ドアが

閉まりかけた瞬間に滑り込み、ギリギリ間に合った。

「ふ～、危ない危ない。」

制服をボロボロにしながらも走り込んで来たのは、カイ。

小柄で、高校生には見えないほどガキっぽかった。

「つたく、毎日、ギリギリで来てきつくないのかよ」

リョウは、カイに厳しく言った。

「だつて、しうがないじやん。家遠いもん」

ほっぺを膨らましながら、カイは制服についた埃を払つた。
毎日、そんなやり取りをしていた。

カイの仲間は、今時の若者つて感じの連中だ。

喫煙、タバコはもちろん、ケンカなどもしていた。
したがつて、悪い目で見てる奴らもいた。

しかし、そんな事は関係なく楽しく暮らしていた。

学校に着き、カイ達は仲間達と楽しく過ごした。

放課後、カイ達は駅のたまり場へ行つた。

たまり場には、後輩達が何やら話をしていた。

「何を話してんなんだ？」

リョウが後輩達に聞いた。

「リョウさん。お疲れ様です」

後輩達は、リョウを恐れているのが丁寧に挨拶した。

「また、みんなで楽しい事を相談していくのでしょうか？俺たちも混ぜ

て」

「うわいよ。カイに話しても、疲れるだけだからね

カイは後輩には、普通に接しられていた。

それもそうだ。

後輩から見ても、子供っぽく、頼りがないからだ。

カイも、堅苦しい敬語よりか同級生感覚で接した方が、嬉しかった

から何も言わない。

でも、実は後輩達は、みんなカイが大好きだった。

怒らないし、面倒見もいいし、何より後輩には優しかった。だから、
□では変な事言うけど、カイには隠し事はしなかつた。

「で、何だ？」

タカシが聞いた。

「実は、ここ最近、と～も～の様子が変なんです。俺たちとは喋らずに、避けてるみたいで、噂によると、最近暴走しまくってる『ブ
ラックゴッド』とか言う、暴走族に入ってるみたい。」

説明してるのは、た～け～と言つ後輩だ。後輩の中でも中心的な存
在だ。

「ブラックゴッド？ 变な名前。」

「なんでも、ここ最近出来たばかりらしいんだけど、裏でヤクザ
がバックに付いてるからと、盗みや暴走しまくってるみたい。」

た～け～は、カイやリョウに説明した。そんなやりとりをしてると、
カイ達が乗る電車が来た。

電車に乗ろうとすると、リョウがカイに話しかけてきた。
「で？ どう思う？」

「ん～わからない。まつ、と～も～に悪影響がなかつたら、いいん
じゃないかな？ でも…」

カイは、真剣な顔になり電車で帰った。

次の日、カイは一人最終の電車に乗ろうと、駅にいた。
裏でタバコを吸つていると、そこにと～も～が来た。

「あっ、カイ兄も今帰り？」

少し疲れた様子で、カイに近づいて來た。

「おう。どうしたんだ？」

「疲れた～。」

カイの隣に座ると、タバコに火をつけた。

「最近、みんなとまわってないんだって？ 噂で暴走族に入つてると

聞いたよ。」

カイは心配そうに言った。

「何だ。みんな知ってるんだ。」

噂は本当みたいだ。

「お前は大丈夫なのか？」

さらに、心配した。

「大丈夫だよ。ブラックゴッドのみんなも、いい人だし、目的があるからさ。」

とくもーは、少し下を向いた。

「目的？」

カイは聞いた。

「うーん。まついつか。カイ兄は、信用してるし。実は、ブラックゴッドに、たゞけー達が狙われているんだ。この前、たゞけー達が、ブラックゴッドの暴走を邪魔してさ、それでね。

俺が、ブラックゴッドに話したら、1ヶ月下で働くなら、手は出さないという約束なんだ。

だから、1ヶ月頑張って、またみんなで平和に過ごjしたくてさ。」

そういうと、とくもーは笑った。

「俺さあ、あいつらといふと楽しくて、いつも、笑つて過ごjせるからさ。助けてもらつてるし。だから、今度は俺が、あいつらを守るんだ。」

嬉しそうにとくもーは話した。

「でも、いいのか？みんなと遊べなくて。」

「うん。平気。

あいつらの為なら、我慢するよ」

そう言つと、立ち上がつた。

カイも立ち上がり、

「お前、さすが俺の後輩だな。でも、早い話は、そのブラックゴッドを潰せばいいんじゃないか？」

俺が、こいつ一発ぶん殴つてやるよ

そうカイは言うと、拳を前に出した。

「ハイハイ、カイ兄には無理ですよ。

この話は内緒だからね。」

とくもーは、そのまま、電車に向かった。

それから一週間後。

カイはとくもーとの約束を守り、みんなには話さなかつた。
けど、次第にとくもーとみんなとの間は、険悪になつていつた。
そんなある日、こいつものように、駅でみんなでたまつていると、

「大変大変！」

そう、慌てながらしのぶが走ってきた！しのぶというのは、カイ達の後輩の中でも、一番女の子っぽい男だ。泣き虫だ。
血相を変えて來たので、みんな驚いた。

「どうしたんだ。いつたい」

そばでジュースを飲んでいたリョウが聞いた。

「さつき、喫茶店にいたらセ、ブラックゴッドの連中がいてセ、今夜に街を荒らすみたい。その時に、とくもーが生け贅されるつて息を切らしながら、しのぶは言つた。

「生け贅つて、あいつら仲間じゃねえのかよ」

みんな、だんだん怒りが込み上がつてきた。

「このままじゃ、とくもーが袋にされる。俺たちで止めるぞ。」

そう、たゞけーが言うと、駅を離れようとした。

カイは、みんなの前に出で、

「ちょっと待てよ。今のままじゃ、とくもーが悲しむだけだ。もう少し、様子を見れ。」

みんなを止めたが、

「なんこと言つていたら、街もとくもーも、めちゃめちゃにやられるだろ」

たゞけー達は、カイの言葉を無視して、行こうとした。

その時、とくもーが現れた。

「どうしたの？みんな。そんな怖い顔してさ」

と～も～は、みんなを見渡した。

ゆつくりと、たゞけ～は近づいて、

「お前、知っていたのか？今夜、ブラックゴッドの連中が街を荒らすって。

その時に、お前が生け贋にされ袋叩きにされたよ」

と～も～は驚いた。

「えっ？ 何それ？」

待つて、ちょっと意味が…」

そう言いかけると、何かを思い出したように、走りかへ走つていつた。

たゞけ～達は、追いかけようとしたが、またカイが前に出て止めた。

「カイ兄、どいてくれよ。」

「いやだ。少し落ち着け。と～も～は、お前たちの為に、ブラックゴッドに入ったんだぞ。いたくもねえのによ。お前らを守るためによ。」

カイは、と～も～の事を話した。ブラックゴッドに入った理由を。

その頃、と～も～はブラックゴッドのたまり場へ行つていた。いきおいよく、ドアを開けると連中を睨みつけた。

奥に座つてた男が立ち上がり、

「おいおい、どうした？ そんな怖い顔をして」

と～も～は、睨みながら男に近づくと

「近藤さん、約束がちがうんじゃねえのかよ。俺が1ヶ月、下で働けば周囲の奴らに手はださねえって言つただろ。」

と～も～は、近藤の胸ぐらをつかんだ。その瞬間、近藤の手がのびてきて、と～も～の頭をつかみ、いきおいよく床に押し付けた。

「勘違いするんじゃねえぞ。ガキが。
誰がいつ約束を破つた？」

と～も～は、押さえつけられながらも、睨み

「きたねえぞ！約束は約束だろ。あいつらひま手は出さな
そつ言つても、と～も～の言葉をあざ笑うかのよつて、
「俺は、手は出さないと約束した。俺はな。」

と～も～から離れると、

「さあ、野郎ども。俺は一切手は出さない。しかし、売られたら、
ケンカを買うぞ。

もうそろそろ、誰かが来るからな。」

そう言つと、高笑いした。

と～も～は、みんながここに来ると思い、走つた。
(みんなを止めなきや。みんなを守らなきや)

そう思い、走つた。

その頃、カイから、と～も～の事を聞いたみんなは、

「あいつ、バカだな。俺たちは、別に何も思つてないのによ。

と～も～は、ブラックゴッドの仲間じゃねえ。俺たちの仲間だ。
俺たちの手で取り返してやる」

そう、たゞけ～が言つと、またブラックゴッドのたまり場へ向かお
うとした。

その時、

「みんな、待つて」

と～も～が、息を切らしながら来た。

「みんな、待つてよ。ブラックゴッドの奴らには、話をつけたから
さ。何も行く事ないよ。」

そつ言つて、みんなを止めた。

「と～も～、もうこいんだ。さつき、話は聞いた。俺たちのためな
んだろう？」

そこをどうよ」

たゞけへは、と～も～をどかそうとしたが
「いやだ。行つたら死ぬよ？」

と～も～は、必死に止めた

たゞけへは、ゆつくりと近づき、と～も～を抱きしめると
「もうやめようぜ。十分、俺たちを守つてくれたよ。お前は。だか
ら、今度は俺たちが守るよ。

負けるかもしれないけど、仲間を守るために命をかけてやる。
と～も～、ありがとうな」

そう言つて、ゆつくり離れ、ブラックゴッドの所へ向かつた。

と～も～は、泣きくずれた。

「ちくしょう…」

そう叫びながら、地面を強く殴つた。

どんじんと、拳から血が出てきた。

パシッ

誰かの手が、と～も～の拳を受け止めた。

ゆつくりと顔をあげると、そこにはカイがいた。

「やめろよ。壊れるぞ」

優しく言葉を言つても、と～も～は手をふりほどいた。

「離せよ。カイ兄には、関係ないじさん。

…ダサいよな。みんなを守るとか言つて、いつも守られてばっかり
でよ」

と～も～は泣きながら言つた。

「俺は、と～も～はちゃんと守つたと思…」

「なぐさめなんかいらねえよ。カイ兄には、わからねえよ。俺たち
の事なんかよ。俺たちが、どんな風に過ごしてきた事とかよ
と～も～は、カイにハツ当たりしたが、また涙があふれた。

「てめえ、いい加減にしろよ。カイはな…」

リョウが、とて もーに怒鳴ると、横からカイが止めた。

そして、リョウを見ると首を横に振った。

ゆつくりと、と もーに近づきカイは話した。

「たしかにさ、俺はお前らの事、何一つ知らねえ。何を考えてるかもわからねえ。

でも、お前らが嬉しい時には一緒に喜べるし、悲しい時には、一緒に悲しむ。

それぐらいなら、俺にもできるじやん。だからよ、少しだけでも、話してくれよ。

俺たち、年齢とか関係なく仲間だろ?

」
そう言って、笑った。

しばらく、カイの言葉を聞いていたと もーは、精一杯の声を出した。

「カイ兄

…がい…けて…

お願いします…みんなを…助けてください…」

泣きじやぐると もーに近づき、ポンと頭を撫でると、優しく笑った。

そして、立ち上ると、カイは叫んだ。

「よし! まかせておけ!」

その言葉を聞いて、やうにと もーは泣いた。

「行くか」

リョウとカイは、ブラックゴッドのたまり場へ向かった

ブラックゴッドのたまり場では、たゞ けく達が戦っていた。

しかし、みんなボロボロの状態で立ち上がる事を出来なかつた。

「オイどつした? そつちから、ケンカしに来て、もつ終わりか?」

ブラックゴッドの連中は、余裕そうに笑つた。

「終わらぬーよ。と もーを返してもらつまではな

たゞけは、体中傷だらけで、必死に立つた。

目の前にいた男の蹴りが、たゞけのわき腹に入り、また吹き飛ばされ倒れた。

「つたく、弱すぎるんだよ。

近藤さん、もう殺してもいいですか？」

奥で、タバコを吸つてる近藤は

「好きにしろ」

そう言つと、不気味に笑つた。

「よし、じゃあまずは、一番生意氣なお前だ」

そう言つと、たゞけの前に立ち、顔を踏みつけた。

「あ…ぐつ…」

「弱いくせによ、何がどもを返せだ。おとなしく、家で寝てればいいものをよ」

たゞけは、顔踏みつけられながらも、抵抗した。

「返せ…俺たちの仲間を…」

その言葉を、消すかのように男は

「仲間? どもは、お前らの仲間じゃねえよ。あいつは、我がブラックゴッドの一…」

そう言いかけると、突然、ドアから凄い音がした。

どん。どん。

何かを激しくぶつける様な音がして、そこにいる人達は驚いた。

「何の音だ? おい、見て來い。」

近藤が指示をすると、たゞけの近くにいた男が見に行つた。ドアに近づくと、突然ドアが倒れ、外から逆光を浴びながら、2人が入ってきた。

「誰だ?」

男は警戒しながらも、よく見た。

ゆっくりと中に入ってきた2人は、途中で立ち止まつた。

「返してもらおうか。俺の大事な後輩達を」
カイとリョウだ。

「リョウさん。カイ兄」
たゞけー達は、意外な人に驚いた。

「貴様ら、誰だ？」

男は聞くが、2人は無視してたゞけー達の前に歩いた。

「大丈夫か？」

カイは、たゞけーを心配して声をかけた。

「何で、ここに…？」

カイは、につこり笑うと後輩達を見渡した。

「カイ兄。危ない」

たゞけーが叫ぶと、後ろから男がカイに向けて蹴りを入れてきた。
しかし、すかさず交わし、同時に右手で殴つた。

男は、ふき飛び気絶した。

「黙つて待つてろ。」

カイは睨みつけた。

初めて見る、カイの表情にたゞけー達は驚いた。

「よし、じゃあやるか。」

カイは、拳を握りしめブラックゴッドの前に歩いた。

「カイ兄、1人は無理だよ。」
たゞけーが止めるが、リョウが

「大丈夫だ。あいつならよ」

「えつ？」

たゞけは、何を言つてゐのかわからなかつた。

「おい、殺すなよ」

リョウはカイに叫ぶと、

「わかつてゐ。たゞけ、もう少し待つてな。すぐに終わるから」

カイは、そう言つとブラックゴッドと対立した。

「カイ兄、死んじやう…」

たゞけはまだ心配したが

「平氣だ。あいつは、俺の中では日本一強い男だ」

リョウは余裕そうに言つた。

たゞけ達は、意味がすぐにわかつた。
ブラックゴッドの一人が余裕ぶつて、

「じゃあ、俺から行こうかな」

そう言つて、首の骨をならしながら、カイに近づいてきた。

「おい、俺たちにも楽しませろよ。」

ブラックゴッドの連中は、カイをからかいつに笑つた。

「つたくよお、正義のヒーローみたいに来やがつて、さつと帰つて寝てねばいいものをよ…」

男は、材木をカイに向けて振り下ろした。

が、その瞬間、カイのパンチが男の腹に入り、一発で倒れた。

「いちいち、つるさい野郎だ。少しは黙つてさ。」

カイは、ブラックゴッドをにらんだ。

「何だ」「こつは…

」

ブラックゴッドは、少し後ろにひいた。

「おい、さつさと終わらしたいんだ。一人ずつじゃなくて、一邊に来いよ。
じゃないと、負けるぜ」

カイは、挑発すると、

「野郎、なめやがって」

ブラックゴッドは、全員でかかつた。

「まつ、どっちみち無理だけどな」

カイは、笑みを浮かべブラックゴッドに向かつて走った。

次々に倒されてゆく、ブラックゴッドの連中。

カイは、驚くような動きで、一気に倒していった。

「すげえ。あれがカイ兄？」

たゞけー達は、目の前の出来事に驚くだけだった。

勝負は、すぐについた。

カイ以外は、倒れカイは一人息を整えながら立っていた。

「よし、あとは…」

そう言つと、近藤へ目を向けた。

「んの野郎、なめやがつて」

近藤は、悔しがりながら座つてた椅子から立ち上ると、指をならした。

「さつあと、負けてもひうぞ」

ゆつくり、近藤に近づくと、そばで倒れてた男が近くに落ちてある材木を取ろうとした。

「カイ兄！」

間一髪の所で、たゞけーが呼びカイは気づいた。

材木を踏みつけると男を睨み付け、
「ガキが。動いたらバラすぞ」

男は、かなりの恐怖を感じ、その威圧感で動けなかつた。

カイは、先手を取るために近藤に突っ込んだ。

が、その瞬間、何かが飛び込んで来て、カイの頬をかすめた。

頬からは、刃物で切ったような後が残り血が垂れた。

血を拭いながら、近藤を睨み付けると、

「武器を持たなきや勝てないと思つんだ」

近藤をみると、両手にチョーンを持つている。

「これが、俺のスタイルなんでね。蛇のように動くチョーンは、てめえの肉を切り裂いてゆくんだよ」

そう言って、余裕の笑みを浮かべた。
カイは黙つたまま、立っていた。

「死ね」

近藤は、チョーンを操りカイに向けた。

すかさず横に移動して交わしたが、カイの後ろの壁は粉々になつた。

「少し、やつかいだな」

何とか、チョーンから逃げていた。

「ちよろちよろ動いてんじゃねえよ。」

またもや、近藤のチョーンがカイに向かつて来た。

難なくよけたが、近藤は不適な笑みを浮かべた。

カイは、すぐに気づいた。

よけたと思ったショーンは、すぐ上のサンドバックに当たり、速さを増してカイに突っ込んできた。

「ちつ」

すかさず、両手で頭をガードしたが、衝撃が大きすぎてカイは、奥の部屋に飛ばされた。

「カイ兄！」

たゞけ、達が心配しても、カイと近藤は部屋に入ったまま出て来なかつた。

「大丈夫だ。こんな事で、くたばる奴じやねえよ。」

リョウは、真っ直ぐな目で部屋を見つめていた。

一方、部屋の中には、

「何だこりは？」

部屋の中を見て驚いた。

一つのバーみたいな、おしゃれな感じの部屋だった。

「ようこそ、ブラックゴッドの部屋へ」

後ろを見ると、突然ショーンが伸びてきてカイは巻き付けられた。

だが、何も言わずに近藤を睨み付けた。

「どこの奴だが知らねーが、後悔するんだな、俺らブラックゴッドにケンカ売った事を。

たかが、『ロミ』一匹のために命をかけるなんてな。青春、いのつむりか？」

近藤は、高笑いした。

「……てんだ」

「あ？」

「てめえ、誰の事『ロミ』だと呟つてんだ！」

わざわざまでは違つ顔のカイを見て近藤は驚いた。

その瞬間。

「つおお～ーー！」

ブチツ！

カイは力だけでチョーンを千切った。

「バカな。どんな力を出しゃがつた。」

目の前の出来事を、ただ驚くだけの近藤。

「ともーは、俺の大事な仲間だ。あいつが、嫌いな場所なら俺がぶつ飛ばしてやるよ」

ついで、部屋の中の椅子を蹴り飛ばした。

椅子は外の方へ、出ていった。

部屋の外では、ともも來て急に椅子が飛んで来た事に驚いた。

「中で何が起つてるんだ。カイ兄は？」

ただ、立ち尽くすしかないと、けつ達だった。

まだ、部屋の中で暴れまわっているカイ。

卷之三

近藤は、必死に止めるが、カイの右手が近藤を捕らえた。

一
ちよ
待て

近藤の話に耳も傾けず、思いつきり殴った。

近藤は、口や鼻から血を出しながら、部屋の窓から飛び出された。

す”]に音を立て、飛び出してきた近藤に、リョウやたけ達は驚

「つづり、カイは部屋から出ると、ともを見つめ、「とも、お前は俺の大事な仲間だ」そう言って、ブイサインをした。

とへもへは、涙を浮かべ大きくなづいた。

歓声が上がり、みんなで勝利を喜ぶと、近藤が、ヨロヨロと立ち上がりつた。

「てめえ、」のまま終わると思つたよ。」

そつまつて、カイを睨んだ。

「いつでも、うけてやるー俺の仲間に手を出すなら、いつでも俺が相手だ」

カイは、強い口調で叫びつと、みんなを連れて帰つた。

その帰り道。

「しかし、すごいな。カイ兄が、あんなに強いなんてよ。少しひびつた。

でも、何で隠してたの？」

一緒に歩いていたワタルが聞いた。

「それは…」

カイは、急に下をつむいた。

その様子に、後輩達は疑問に思った。

「言こなよ。お前の事全部わ」

リョウが、カイの肩をポンと叩いた。

「…わかった。じゃあ久しぶりに、実家に行って話すよ。」

カイは、そう言つと実家に案内した。

着いた瞬間、後輩達は驚いた。

日本的という言葉が似合つて、どつかの道場のような、でかい門が目の前に広がつた。

しかも、その門を通ると玄関らしき所には、ずらりとスーツを着た、人相の悪い大人が並んでいた。

「ぐつとつぱを飲み込むと、その男達は一斉に頭をさげ声を揃えた。

「お帰りなさいませ、若様」

突然の事で声も出ず、ぼーぜんと立つてゐしか出来なかつた。

「早く入れよ」

カイとリョウは、慣れてるかのよう、ズカズカと家中へ入つて行つた。

いつ殺されてもおかしくない状態で、たゞけく達は入つた。
時代劇で出てくる様な長い廊下を通ると、カイは一つの部屋で立ち止まつた。

「じゃあ、ここで待つといでな」

そう言つと、どつかに行つてしまつた。

部屋で待機してゐる中、さつきの男達が入つてきた。

後輩達は正座して、リョウは普通に座った。

「なんで、こんな所にいるんだよ」

たゞけは小声でワタルに言つと、ワタルも小声で

「俺たち、終わつたな」

びびつてゐる様子だ。

そして、緊張感の中、部屋の障子が開いた
異様な空気が流れ、入ってきたのはカイだった。

でも、初めてみるカイだ。

白いスーツで、堂々としていて、まるで別人のようだ。

たゞけ達は、声が出ずただ見ているだけだった。

そして、何も話さないでいると一斉に、男達は立ち上がり、
「『苦勞様です。若』

その言葉を聞いて、たゞけ達は気づいた。

カイは、座りながら

「じゃあ、話すよ。」

そつ言つと、カイの隣にいた男が

「若、私が説明します」

そつ言つて、話した。

「ここにおられる方は、日本でたつた一つの極道大組織、

第五代目伝承後継者、鬼澤カイ様です。

青龍会

「

たゞけゝ達は、驚いた。

「青龍会つて、あの極道大戦争で有名な……？」
ワタルが、とつさに言った。

「そうだ。若は物心つく前から、柔道、剣道、空手、ボクシングなど、世界の格闘技を学び、今やプロにも負けない実力を持っている。従つて、この日本には敵はないと考えられる」

カイの隣にいた男は、自慢げに話した。

ただ驚く後輩達を見て、急に悲しい目をしたカイは
「『めんな。隠すつもりはなかつたけど…

やつぱり、怖いよな。ゴメン』」

そう言って、部屋を出た。

一方、その頃、カイに負けたブラックゴッド達は、リベンジしようとバックに付いてる奴と会つていた。

「小早川さん。お願ひします。手を貸してください」

小早川は、真剣に話を聞くと

「てめ～ら、バカか。てめ～らみたいな小物が勝てるわけねえだろ」

小早川から説明聞いたブラックゴッド達は、
「嘘だろ？ やべえ人にケンカ売つていたんだ」

「あの人には、百年かかっても勝てねえよ。

俺ら青龍会の次期会長だぞ？
これ以上、命を縮めるな」

そう言って、小早川は立ち去った。

カイの秘密を知った後輩達。

また、眞実を言ったカイ。

これから先、大事件が起ころる事は誰も知らなかつた。

第2話 仲間（前書き）

カイとリョウの過去。秘密を知ったリョウがカイにとつた態度は？：

第2話 仲間

カイの秘密を知った後輩達は、誰も口にしないまま、今日はカイの家に泊まった。

カイの家人が、布団を用意してくれた。

布団の中で後輩達とリョウは話をしていた。

「しかし、驚いたよ。カイ兄が、あの青龍会の跡継ぎだったなんて

さ。

かつこいいけど…少し怖いかな」

ワタルは、胸の内を言った。

それもそのはずだ。今まで、何も変わらなかつたカイが、急に極道の人です。と言われたら、普通の人は怖がつてしまつ。

リョウは、ゆっくり口を開いた。

「カイは、この事を悩んでいたんだ。お前らに知られたら、怖がつて話をしなくなる。だから、秘密にしていた。」

後輩達は、少し考え、たゞけゝが話した

「リョウさんは、ずっとカイ兄と一緒にでしたよね？昔はどんなでした？」

後輩達は興味津々に聞いた。

「カイとは、小学校からだからな。

俺も初めて知つた時は、引いたよ。誰もカイに近づかなかつた！でも、ある日や、こんな事があつたんだ。」

カイの家の事を知った時の事を話した。

あの日、リョウとタカシ、そしてカイの同級生たちは秘密を知った。

「嘘だろ？お前が、青龍会の跡継ぎだなんて…」

カイの同級生のカズキは、驚いた。

「ゴメン。騙してるつもりはなかつたんだ。」

カイは泣きそうな顔でみんなを見た。

「つもりはなくとも、俺らをどうするつもりだつたんだよ。今まで、普通の友達として接してきたが、正直に極道のものとは関わりたくない。

これ以上、俺らに近寄らないでくれ。」

リョウは、いつ何が起きるかわからず、怖がっていた。

カイは、黙つたまま立ち去つた。

それから2ヶ月になつても、誰も近寄らなかつた。

そんな時、カイの異変に気づいた青龍会では、カイを傷つける奴は敵と思い、リョウ達を狙つていた。

「てめ～ら、若に何を言つたんだよ。

我々を敵に回すとは、たいした根性だな。」

数人の極道の奴らに囲まれながら、リョウ達は震えていた。

「覚悟は出来るだろうな

青龍会の奴らが、リョウ達を殴りつけようとした。

その時、

「何をやつてんだよ……」

カイが現れ止めた。

「カイ……」

「若……」

ひとまず、青龍会のみんなは落ち着いた。

「ここからは、もう俺とは関係ないんだ。」

カイは必死で止めていた。

「しかし、若……」

我々の事は、知られてはいけない！秘密を知つて、若を苦しめるなら、青龍会の敵だと……」

「一般人を傷つけるなど、言つたはずだ」

カイは青龍会の奴らを睨んだ。

すると、一番後ろにいた小早川は前に出てきて、

「お言葉ですが若……では、若も今は敵だと思つてもいいのですね？」

」

カイは黙つた。青龍会と対立する事は、撃を破るという事だからだ。

「若……今ここで言つてください。

我々青龍会と一般人、どちらにつくんですか？

青龍会を選ぶなら、ひとまず引きます。しかし、一般人を選ぶなら、いくら若でも許しません。」

カイは黙つた。

後ろで聞いていたリョウ達は、（どうせ、俺らの事は選ばないな。そうした方がカイのためだしな）そつ誰もが思つていた。

「俺は……」こいつらを選ぶ

誰もが驚いた。

「バカかお前… 青龍会を敵に回す事になるんだぞ？」

タカシは叫んだ。

「わかるよ。でも、どんなになつても、俺はみんなを裏切らない。

俺ら仲間じゃねえか。

俺の大切な仲間じゃねえかよ」

泣きながらカイは言つた。

「若…こいつらは、若を傷つけたんですよ。極道の跡継ぎとわかつた瞬間に仲間の縁は切れたんですよ？」

「それでもいい… 俺は俺が仲間だとおもい続けるかぎり、仲間なんだよ！」

カイは叫んだ。周りのみんなは黙つた。

「わかりました。我々は若の敵になります…
と言いたいんですが、止めました。若は、仲間を持つて幸せなら十分です」

そう小早川が言つと、青龍会の奴らは去つていった。

安心したかのよう」、リョウ達は腰掛けた。

「『メン。また迷惑かけたね。』

カイは離れようとしたら、

「つたく、マジにバカだよな。」

リョウがカイに向け言った。

カイが後ろを向くと

「本当にバカだよな。チビでバカでドジで…」「そんな奴をほっとけねえよ。」

カイはまた泣き出した。

そして現在。

後輩達は話を静かに聞いていた。

「あいつバカだよな。いつも自分が辛いくせに人のためになんでも
れ。

子供っぽいカイ：

ドジなカイ：

それもカイなんだけどよ。

本当のカイは、寂しがり屋で甘えん坊で、世界を敵に回しても仲間
を大事にする、カイだ。

あの時、泣きながら仲間だと言ったカイが本当の姿だと思うよ。」

後輩達は、何も話さない内に寝た。

次の日、朝食を食べていると、

たゞけゝが

「カイ兄、俺らカイ兄とは今まで通りにするからさ。
カイ兄はカイ兄だし」

そう言つた。

カイは思わずにはやけて、
「お前ら、愛してるぞゝ」
そう叫びながら抱きついた。

バカでドジで子供っぽいカイ。

今の仲間を大切にすると心に決めた

第3話 守るべきもの

カイの家の事を知った後輩達。

それでも変わらず、今まで通りに接していた。

何も変わらない、いつもの毎日だった。

「聞いて、そういうえば、ホクトに彼女が出来たんだってさ～」

「バカでかい声で、注目を浴びたのは一番泣き虫のしのぶだ。

「マジ！ どこの人？」

カイは、大切な後輩に彼女が出来たことが嬉しかった。

「隣の高校の人。かなり可愛いよ。」

みんな、それぞれ思い浮かべ、羨ましがつた。

「いいなあ～。彼女かあ～。俺にも出来ないかな？」

カイは妄想でにやけた。

後輩達は、口をそろえて

「ムリムリ」

と、からかった。

すると、駅にホクトと彼女が現れた。

恥ずかしながら、こっちを見てにやけてる。

「ヒュ～ヒュ～。」

カイは、二人をからかいながら、内心は喜んだ。

「カイ兄、ウザイ。うらやましいなら、早く彼女見つけるよ。まつ
ムリだけど」

ホクトは、ピースすると彼女と一緒に歩いていった。

大切な後輩の幸せそうな顔を見てカイは、嬉しそうな顔をした。

ホクト達は、みんなが羨ましがるほどバカッフルぶりだった。
したがって、みんなは暖かい目で見ていた。

「ミカ～、聞いてるか？」

時々、周りをキヨロキヨロするミカにホクトは不信感を抱いていた。

「どうしたんだ？ 最近やたらと周りを気にしてるじゃねえか？」

「そ… そうがな？」

「はは～ん。さては恥ずかしいんだな？」

ホクトは、可愛いと思いにやけた。

「ホクト、最近変わった事ない？」

ミカは小声で聞いた。

「ないよ？ 何で？」

「実は…」

ミカはホクトにあることを話した。

「まじかよ！大丈夫か？」

心配な顔でミカを見つめた。

「今のところはね。でも…」

また暗い顔になると、ミカはうつむいた。

ホクトは、しばらく黙り、ふと思いついた。

「カイ兄に相談してみようか！」

普段は、カイをからかう後輩達だが、やはり頼りにしてるようだ。

さつそくカイと会った。

「で？話って？」

喫茶店のテーブルに、ズラリと並んだデザートを見つめながら、カイは聞いた。

「はあ～、カイ兄さま、何とかならないかな？この子供っぽいところさあ」

相変わらず、年上のくせに、見た目も中身も子供っぽいカイを見て、ホクトは呆れた。

そんな声も無視して、カイはデザートを食べ始めた。

「もういいや。話すよ。

実は…ミカがストーカーに合ってるみたいなんだ。」

突然の事で、ほおばつていたケーキを吐き出した。

「ストーカー？」

ホクトは、かかつたケーキを拭きながら話した。

「これ見てよ。一週間前から、こんなメールが来るようになつたんだ。何度アドレスを変えて、またすぐに来て……」

カイは出されたケータイを見た。

『ミカちゃん 今日は帰りは遅いね また、あの男とエッチな事していたのかな? キミは、オレの子供しか産めない体なんだよ。』

気持ち悪い内容が、受信ボックスに何件もあった。
しかも、一時間おきにだ。

「キモイな。心当たりはないの?」

カイはミカを見た。

ミカは下を向き、

「実は、元カレのメールに似てるんですよ。あの人は、最後にいつも、うだよつて使うから。」

カイは、しばらく見ると

「よしつわかった。コイツを呼ぼう。オレも一緒についてるからさ。」

「

次の日、カイとホクト達はメールの相手と会つた。

やはり、ミカの元カレだった。

会つた瞬間に、ホクトは殴つた。

「どこの奴だが、知らないけど。コイツに手を出したら許さねー」

ひとまず、カイはホクトを止め話をした。

「…といつわけだから、コイツらには、もう迷惑かけんなよ」

元カレは、ゆっくり頷くと店を出た。

「これで一件落着だな」

ホクトは、ミカと見つめ合った。

「ホクト、これからもミカちゃんを守れよ。次はオレは手は貸さないからな

カイは、そう言つと2人と別れた。

しかし、まだ終わらなかつた。

一週間後：

ホクト達は、ストーカー事件を忘れていた。
その日も、2人で遊びミカは夜遅くに帰つた。

「じゃあまたね。」

いつものように、部屋に行くとミカは驚いた。
部屋の中がめちゃくちゃに荒らされている。

ミカは恐怖で震えた。

机の上を見ると、置き手紙があつた。

『おかえり、ミカちゃん』の前は嬉しかったよー。//カチャーンから会つて来て。だけど、あの男も連れて来るから驚いた。だが、ミカちゃんは僕のものだ。これからもね！あの男に話したら、アイツを殺すよ。覚えておくんだよ』

ミカは恐怖だった。しかし、元カレの事だから本気だと思い、ホクトには内緒にした。

それから3日経つた。

ホクトの前では明るくしていた。

そして、事件は起きた。

カイはその日は、青龍会の食事会で下の連中と食事していた。

「若。どうですか？学校の方は？」

小早川が聞いた。

「ん？普通だよ。みんなどこかと樂しにしちゃ。」

「そういえば、今日若の後輩を見ましたよ。あのホクト君の彼女。少し若い男が近くにいましたけど……」

「若い男？」

「はー。一緒にいるとは言えないですが、男が遠くから見てる感じで……」

カイは胸騒ぎがした。

「そいつ、どんな顔してた？」

「サングラスをかけてましたよ

カイは確信した。

その男は、例のストーカーだ。

カイは席を立ち走った。

一方、ホクトはミカを見送っていた。

「じゃあまたね」

普通に別れた。

ミカが家の中に入るのを見ると、ホクトは後ろを向き歩いた。

その瞬間。中からミカの悲鳴が聞こえた。

「ミカ？」

急いで家の玄関に行つたが、カギがかけられている。

隣の窓から見ると、元カレがミカの前にいた。

手にはナイフがある。

「ミカ！」

ホクトは玄関を開けようとしても開かない。

「助けて！ホクト！」

必死で助けを求めるミカを見て、何も出来ない自分が悔しかった。

「どうすればいいんだよ」

その時ケータイが鳴った。

「おい！ホクトか？」

電話の主はカイだ。

「カイ兄。今ミカが…」

「知ってる、今オレも向かつてるから。」

カイは走っていた。

「カイ兄。どうすればいい？オレ…」

ホクトは、泣きそつな声でカイに言った。

「バカやろう！てめえが、情けない声だすんじゃねえよ！てめえが好きになつた女だろう？
てめえの力で守りやがれ。」

カイは怒鳴った。

ホクトはしばらく黙ると、涙をふいた。
「わかった。でも、カギが…」

「カギなら壊せ。大丈夫だ。オレが指示を出す。」

ホクトは、決心した。

(ミカはオレが守る)

カイは電話越しに、ホクトに話した。

「まず、助走つけるためにドアから離れ、」

ホクトは指示通りに離れた。

「一気にドアを突き破るように体当たりしぃ。」

ホクトは深呼吸すると体当たりした。

だが、まだ壊れなかつた。

「カイ兄…」

「あきらめるな。大丈夫だ。ミカを守るんだろう?」

そしてまた、勢いよく体当たりをした。今度は、思いつきりした。

ドアが外れた。勢い過ぎて、家の中で倒れたが、すぐにミカの前に行つた。

「てめえ、何してるんだよ」

ホクトは殴りかかったが、男はナイフでホクトの右肩を切りつけた。

「ホクト！」

ミカはホクトに駆けつけた。

ミカを後ろにして守るようにホクトは男を睨んだ。

「邪魔なんだよ。僕のミカちゃんを取るな！」

男は、ナイフで刺そうとしたがホクトは受け止めた。

「ミカは誰にも渡さねー。ミカはオレの女だ」
つかみ合いになり、部屋はめちゃくちゃになつていた。

「ホクト、危ない。」

ミカはホクトを守るようにして、そしてホクトはミカを守るようにかばつた。

「2人とも死ね」

男はナイフで2人を襲つた。

その時！

「そこまでだ」

カイが現れ、男を殴つた。

男は倒れ頭をぶつけ、氣を失つた。

「カイ兄！」

ホクトは嬉しい顔をした。

しばらくして、警察が駆けつけ男は逮捕された。

「つたく…誰に似たんだか危ない真似するなよ」

カイはホクトを見ると、頭をなでた。

「似たのは、誰かさんのせいだよ。どつかのヒーローのね」

カイは笑顔になると、ミカとホクトに抱きついた。

「もう、愛してるぜ」「

「気持ちわりいよ」

2人は、カイから逃げ回つた。

次の日、ニュースで聞いた、たけ達は

「大変だつたね。」

「ああ！でも、信じていたよ。」

そう言つと、横で寝てるカイを見た。

「しかし、カイ兄は子供だな」

「バカだし、エロいし」

「でも、かつこいいオレらのヒーローだよな」
後輩達は、カイを見て笑った。

第4話 弱い奴の強さ

「終わつたあ！」

授業の終わりを告げる鐘が鳴ると同時に、カイは叫んで席を立つた。

「リョウ、タカシ飲みに行こいや」

教室の中だというのにカイは言った。

「そうだな。明日は休みだし、久しぶりに飲むか？」
まだ未成年だが、カイ達にとつては当たり前の事だった。

「そうだ。リオも呼ぶか？」

そつ言つと、ケータイを取り出しリオも誘つた。

一旦帰つて着替えして、カイやリョウやタカシ、そして後輩達も混ざり、青龍会が経営している居酒屋に行つた。

「よし、みんなグラスは来た？」
カイは、かなり楽しんでいた。

「相変わらず、騒いでるね」

声のする方を向くと、

「久しふりじやん。リオ」

カイは真つ先にリオの所に向かつた。

リオというのは、カイと大の仲良しな女の子だ。見た目は、ギャル

つて感じで性格は男っぽい。

だから、普通に女の子一人で飲みに来る事が多かつた。

カイとは友達以上恋人未満の関係で、お互いに何でも話せる親友みたいな存在でしかなかつた。

居酒屋の方は、盛り上がりを見せ始めた！

「いいなあ。こんな事。やっぱり今が一番楽しいね」「カイは、かなり楽しんでいた。

3日後…

カイは学校が終わり、駅に行つた。

いつものたまり場にいると、数名の学生が歩いて来た。

「また、んな所で遊んでるのか？」

真ん中にいた、男がワタル達に話しかけた。

「うるせー。てめえらには関係ねえだろ？」「一気に険悪なムードになつたが、カイは無視した。

「ダイスケ！」

後ろから走つて来たのはシノブだ。

「またケンカしないでよ」

シノブはダイスケを止めた。

「お前も、ここに何かされたら言えよつ。いつでも相手してやるよ」

ワタル達とダイスケ達はにらみ合つた。
そのまま、すれ違つよつに離れた。

「もうごめんな。あいつ、そんな悪い奴ぢゃないから
シノブは、ワタル達をなだめた。

ダイスケはシノブと幼なじみで、隣の街に住んでいる。

いつからか、ワタル達とダイスケ達は、対立しあつて仲が悪かつた。
シノブはお互いとも仲良くて真ん中の立場にいるから、両方を仲良
くさせようとしているのだ。

次の日になり、カイ達は普通に学校に行つた。

「楽しい事ないかな？」

カイはジユースとお菓子を食べながら、リョウとタカシと話してい
た。

「カイは、いつも楽しそうだけど……」

タカシは、大量のお菓子の袋を見て言った。

「学校にそんな物持つて来るんじゃない！」「
突然、怒鳴り声が聞こえた。

廊下に出てみると、女子高生が先生に怒られていた。

「また怒つてるよ。あいつ。」

カイがボソッと言つと、先生が睨んだ。

「文句があるなら、ここに来い鬼澤。」

そう言つと、職員室に入った。

「あいつの態度も、どうかな?って思つ」

この先生は、いつも何かとカイ達を嫌つてる生活指導の玖波だ。生徒の大半からも嫌われている。

「あー・マジムカつく。よし、ふけるか?」

学校の近くにあるカラオケ店に行つたカイ達は、玖波の事なんか忘れて楽しんでいた。

「よし、次行こうぜ」

カイが提案してカラオケ店を出ることにした。

ふと隣の部屋を見るとシノブがいた。

一緒にいるのは、ダイスケ達だ。

いつもは、甘えん坊で少しあとなじげなシノブが、はしゃいでいた。

「あいつ、楽しそうだな」

カイは、シノブを見て微笑んだ。

そんな中、たゞけ達の間では嫌な噂が流れていた。

「マジかよーあいつら、こことこおなじへじてるからってよ

「調子乗つてんな」

何もわからず、その日は終わった。

一週間後…

シノブは一人街を歩いていた。

「おい！」

突然、覆面した男達に袋叩きにされた。

「何だよ。てめえら」

体中ボロボロになりながら、聞くと。

一つのチラシを見せた。

『一週間後、駅前の公園で待つべし。ダイスケ』

シノブは田を疑つた。

「ダイスケと何の関係があるんだ」

何も答えず男達は去つて行つた。

体中ボロボロになりながらも、シノブは駅に向かつた。

「どうした？誰にやられた？」

たゞけー達は、傷だらけのシノブを見て驚いた。

シノブは、何があつたか話した。でも、ダイスケの事は話さなかつた。

「あいつらだな。」

たゞけーは、何かを思い出した。

「実はこんなものが…」

手に持っていた紙を渡した。

それは、シノブが渡されたチラシと一緒にだ。

「あいつら、挑戦状出しゃがつて！」

シノブは、ダイスケがこんな事するはずないと想い止めた。
しかし、みんなは無視して去つて行つた。

次の日、ダイスケに聞いてみると、

「何の事だ？ あいつらじやないのか？」

シノブは驚いた。

「ダイスケ達も知らないの？」

そう言つと、ダイスケは一枚の紙を見せた。

それは、たゞけく達からの挑戦状だった。

「これ…たゞけく達は送つてないよ。」

しかし、聞く耳はもたなかつた。

日に日に、せまつて来る挑戦の日。

シノブはお互に止めるよつて言つたが、両方とも（売られたケンカは買う）の一方で聞かなかつた。

一人街を歩いていると、

「なかなか、うまく行つたな。しかし、あいつらもバカだよな。だ
まされるなんてよ」
そんな声がした。

シノブは、話してゐる奴らを見た。

よく見ると、人数も身長も声も、あの覆面の奴らに似てる。

「まさか、お前らが…」

男達に話すと

「あつ、お前か？前はありがとうな。おかげで、うまく話が進んだよ」

シノブは確信した。（こいつらが、ダイスケ達とたゞ一達を騙して対決させようとしてるんだ）

「何の恨みでやつたんだ」

シノブは、一人の男に殴りかかつたが、すぐに袋叩きにされた。

「恨みはねえが、こっちにも色々あってな。悪いが止めても無駄だぜ」

そう言つて、去つて行つた。

シノブは、悔しくて泣いた。

何も止められない自分に…

呆然として、気づけば駅に着いた。

一人で何かを考えて、決心した。

そして、決戦の日。

シノブはあの男達の所に一人で行つた。

「またお前かよ！もう用は終わつたんだよ。さっさと、帰りやがれ！」

「嫌だ！みんなに説明してくれるまで帰らない。」

シノブは、一人で話しに来ていたのだ。

「つたく、おとなしく見ておけばいいものをよ」

男の一人が殴つてきた。

右頬にパンチを喰らいシノブは倒れた。

「絶対に、帰らない。何でこんな事をしたんだ」
シノブは、男達を睨みつけた。

「ひま潰しだよ！偶然、てめえらを見かけてな。ケンカするんじゃ
ないかつてな。逆に感謝されたいよ。どっちが強いか決められるか
らな」

そう言って、男達は高笑いした。

「ひま潰しだけで、僕の大切な人達を巻き込むんじゃね〜」
シノブは、体当たりしたが難なくよけられた。

「調子乗つてんなよ。」

男達は、一斉にシノブを囲んだ。

「てめえらの方こそ、図にのんなよ」

突然、声がして後ろを向くとカイが立っていた。

「カイ兄。何でここに？」

シノブはカイを見た。

「お前が偶然見えてな。何がどうなってるんだ？」

シノブはカイに今までの事を説明した。

「そうか…じゃあする事は一つだな。

シノブ、俺もこいつらを許せねー！悪いが、俺と変わってくれない
か？」

カイは、シノブじゃ勝てないと聞いいた。

「でも…」

シノブは少し考へると頷いた。

「よし、じゃあ俺はこいつらをぶつ飛ばす！シノブお前はどうする
？」

「俺はみんなを止める」

そう言った。

「よし、それでこそシノブだ！まかせたぞ」

カイが言うとシノブは走った。

「てめえ一人で何が出来るんだよ。」

カイは、何も言わず男達と対立した。

一方、シノブは息を切らしながらもみんなの前に行つた。

しかし、もうすでに始まっていた。

「みんなあ、止めてよ！」

大きな声で叫んだが聞こえなかつた。

シノブは、必死で叫び続けた。

カイは、一気にかたをつけ、男達に聞いた。

「てめえら、俺の後輩を傷つけたら、許せねー！」

男達は恐怖に怯えた。

「待ってくれ！俺たちは頼まれただけなんだ。」

カイは、男達を見た。

「誰にだ？」

「わかんねえよ！ネットで書かれていただけだ。あいつらを対立させたら、十万あげるって」

カイはわけがわからなかつた。

その頃、まだケンカは終わらないたゞ一ヶゝ達にまだシノブは叫び続けた。

「お願いだから話を聞いてよ。」

声がかすれ、ここまで來てゐるのに何も止められない自分が悔しかつた。

みるみるうちに、大切な友達が傷ついていくのが耐えられなかつた。

「シノブ！」

カイがシノブの所に着いた。

「カイ兄。俺…何も出来なかつた…何も止められない！みんなには俺の声が聞こえなかつた。」

カイの姿をみても、涙は止まらなかつた。

「大丈夫だ！俺には聞こえているよ」

カイは、シノブを抱きしめた。

「まだ間に合う。叫べ」

カイの合図とともに、シノブは最後の声を振り絞つて叫んだ！

「みんな、やめて！」

今まで吹いていた風が止まり、両方ともシノブとカイを見付けた。

「カイ兄、シノブ…」

「みんな…やめてよ！…こんなのは意味ないよ。」

泣きながら、説明した。

「そうだったのか…」

ダイスケは、下を向いた。

「だから、意味ないんだよ。ケンカしなくてもいいんだよ」
シノブは、ダイスケの前に行つた

しかし、ダイスケはシノブとすれ違い、
「しかし、もう止めらんねーよ！」

そう言うと、たゞけー達も

「ああ、ケンカはまだ終わらねー」

またもや、両方とも始めようとした。

「やめねえか！」

カイは、たゞけー達の間に來た。

「てめえらまだわかんねえのかよ！シノブが、どんな思いだつたのかよ！」

こいつは、てめえら両方とも大切な仲間だと思つてんだぞ？だから、ケンカなんか望んでない。

シノブはな、この中で一番泣き虫で、おとなしいけど、一人で戦つていたんだぞ！

こいつの気持ちも考えやがれ！

まだ、頭が冷えてねえ奴は、俺が相手してやる

そう言つて、たゞけー達とダイスケ達を見た。

両方とも黙り動かなかつた！

「みんな… お願いだから、止めてよー！ダイスケもたゞけー達もみんな仲間じゃん。僕の大切な仲間だろ？」「

シノブの涙を見て、ダイスケ達とたゞけー達は、戦意を失つた。

「ゴメンシノブ。」

たゞけは、泣きじゃくるシノブの肩に手を置いた。

「シノブ、もうケンカしないからよ。だから泣くなよ」

ダイスケも肩に手を置いた。

「約束だよ？」

シノブは、そう言つと、笑つた。

それから…

「てめえら、誰にガンつけてんだよ」

「それはこいつちのセリフだ」

相変わらず、会つとケンカするダイスケ達とたゞけ達だった。

「もう、約束忘れたの？罰ゲームだよ」

シノブは間にに入った。

「まつ今日のところは許してやる」

「俺たちも大人だしな」

ダイスケとたゞけは、離れた。

シノブが考えた罰ゲームというのは、ケンカしたら、仲良くなるまで両方とも手錠をかけるというものだった。

だから常にシノブのカバンには手錠が入ってる。

嫌いな奴らと一緒にいるのが嫌だから、言つことは聞いていた。

「けど、なんだかんだ言つて、毎日一緒にいるよな。あいつら

シノブを中心に楽しく笑ってるダイスケ達やたゞけー達を見てカイは笑った。

シノブも、泣き虫は直らなくても今は、一番笑っている人になつていた。

「みんな。俺の大切な大好きな仲間だ」
そう言って、とびっきりの笑顔を見せた。

第5話 家族の絆

ポカポカな朝の光
静かに流れる風

人間にとつては、眠たくなる季節だ。
ここにも、この季節のせいで眠たくなつてる奴がいる。

「つたぐ、急に屋上に行こうって言つたら寝るためなのかよ」

横で背伸びをしてるカイを見てタカシは言つた。

「だつて、授業出ても楽しくないしわ、いいじやんたまこはやー」

そつと、空を見た。

「平和だねー…ずっと続けばいいのにな…」

カイは少し遠い田をした。

「あれ、リオだ」

カイ達の学校の屋上からは隣の学校が見える。
リオも隣の女子校にいる。

カイは体を起こし見た。

「何やつてんだ?あいつ…」

リオを見ると、一人で寂しそうに窓から何かを見ていた。
カイはリオと同じ方向に田をやつた。

家族連れが楽しく歩いている。

「ん?」

もう一度リオを見ると、姿はなかつた。
何日か過ぎた。

「つ～か、何でここにいるんだよ」
たゞけは、タバコを吸いながら木に腰掛けた。

「まじ！ 眠いんだけど。」
ワタルもふてくされていた。

今日は、カイやリョウやタカシと後輩達はキャンプに来ていた。
もちろん、カイの氣まぐれだ。

「いいじゃん。たまにはさ、はねをのばしてさ」
そう言いながら、夕食の準備をするカイ。

「カイ、またお菓子だけ、いっぱい買って来たでしょ？」
リオは、お菓子の袋をカイに見せた。

「今、何歳だからお菓子なんだよ？
しかも、キャンプってさ」

リョウもカイの気まぐれに呆れていた。
しかし、なんだかんだ言って、みんな楽しく過ごしていた。
川の近くにカイとリオは腰掛けた。

涼しい風と小鳥の鳴き声で平和を感じていた。

「で？ 何があつたの？」

カイは、リオが元氣ない事を知っていた。

「ん？ やっぱりカイだね。何でもわかるんだ」

リオは、そう言いながら下を向いた。

「実はね、うちの親たち離婚するんだ。前からさ、立ち退き業者が来て、うちの家を追い出されるみたい。それが原因でね」

リオは笑いながら言った。

「お前はいいのか？」

「しかたないよ。家も家族も失つて、また新しく頑張らなきゃいけないからさ。」

リオは前向きに考えていた。

「うちの親さ、前は仲良かつたの。こんな話が出てくる前はね。でもさ、だんだん話がなくなつて、今じゃもう、家に帰つては部屋に入つて出て来ないんだ。

昔は、台所の小さなテーブルで二人で「飯食べてたのに」カイはリオの顔を見ると、リオの目に涙が溜まつてゐることに気づいた。

「そつかあ、まつりオがいいならいいんじやないか。
でもよ、一人じやねえんだぜ。お前はよ」

そう言つて、肩に手を置いた。

「わかつてるよ。これでいいんだつてさ。
でも…少し寂しいね」

リオは涙が落ちないように必死で笑つた。

「よし、何もかも忘れて今日は飲もうぜ。」

リオを連れてまたみんなの前に行き、その日は飲み明かした。

キャンプが終わり、リオは家に帰つて來た。

いつものように、台所に行くと誰もいなくて静かだった。

テーブルの上に一枚の紙が置いてあつた。

リオは手にすると、悲しい顔をした。

それは離婚届だった

わかつてたつもりが、実際に見ると胸が苦しかつた。

ドアが開いた。

後ろを振り向くと、母親が立つていた。

「いたの？」

母親はスーツを脱ぎながら聞いた。

リオが持つてる離婚届を取ると、

「リオは、どちらでもいいからね」

そう言って、また自分の部屋に行つた。

次の日、リオは学校に行く途中でも考えていた。すると、スーツを来た男達が目の前に現れた。

「ここにちはリオちゃん」

不適な笑みを浮かべながら近づいてきた。

「また、あんた達か…言つておくけど、渡さないからね。」

リオは強氣で言った。

「このガキ！！」

男がリオに近づくと、

「待ちな」

リーダーである男が止めた。

「リオちゃん、俺たちも、あまり傷つけたくないんだよ。だから早く両親に言って出てくれないか?」「優しく言った。

「イヤだね」
絶対に引かないリオだ。

「じゃあ仕方ないね。そろそろ最終的手段でいくよ」

そう言つて、去つていった。

意味がわからず、リオは学校に行つた。
帰宅して、家の中を見たりオは愕然とした。

部屋の中はめちゃくちゃで、ガラスも割れたりしていた。

「帰つたのか。」

父親が部屋から出てきて、すぐに母親も出てきた。

「何? 何があったの?」

リオは両親に聞くと

「もうダメだ。このままなら耐えきれない。」

「そうだな。うんざりだ」

やつ言つて、離婚届を出した。

リオは、間に入り

「ちょっと待つてよ。」

止めたが、両親達は聞かなかつた。

次の日に父親が出て行く事になった。

「どうして、こんな事になるの？」

荷物をまとめる父親の姿を見て、リオは泣きそうだった。

突然、チャイムがなった。

「はい」

母親が出ると

「おじゃましまーす」

カイが入ってきた。

「カイ……」

「よつ！元氣か？」

そい言つて、家の中を見渡した。

「カイ、ゴメン今は……」

リオがカイに話しかけると

「ここが、台所か？」

そう笑いながら聞くと、突然、台所以外の部屋をめちゃくちゃにした。

「ちょっとカイ、何をしてるの？」

何も言わずに、大暴れしていた。

「君、何なんだね一体……」

父親も母親も止めた。

「リオ、なくていいんだろ？」

カイはリオに叫んだ。「こんな暗い家なんか無い方がいいよな？父

親も母親も、さつさと離婚して、一人になりたいよな？」

そう言いながら、家中をめちゃくちゃにした。

「私は…私はそんな事思つてない。この家で、お父さんとお母さんと三人で暮らしたいの」

リオは泣きながら答えた。

ふと動きを止めカイは笑った。

「言えんじゃねえかよ。」

リオは気づいた。

カイはリオの本音を聞くためにワザとしたんだと。

「警察に電話しなきや…」

母親は電話を取ると、同時にリオが止めた。

「お願ひ…また三人でここで頑張りつよ。…一人にしないでよ」

リオは母親に話した。

両親は黙つたままだつた。

「そうだな。また一からやり直すか。」

父親は、リオと母親の肩に手を置き抱きしめた。

三人は、幸せそうな顔で見つめあつた。

「こここの修理代は出すよ。あとは家族水入らずで過ごしな。」

そう言つて、カイはリオを見た。

「ありがとうカイ…。でも、ここはもう…」

リオ達の家は立ち退き業者に取られてしまつ。

「大丈夫だ。まかせなさい。…と思つたら、さっそく来たか。」

カイが窓を見るので、リオ達も見た。

あの立ち退き業者が来たのだ。

車の中で、

「今日は何があつても、出て行かせ。拒むよつなら殺せ」
後ろの席に乗つていた男が命令した。

突然、車は急ブレーキをかけた。

「何やつてやがる」

男は怒鳴ると

「ボス……」ボスである男が前を見た。

そこには、青龍会のメンバーが立つていた。

「あ……な……なぜここに……」

男達は驚いた。

カイが後ろから出てきて男達に近づいた。

「どうも、ここに用があるんですか？なら、オレを通してもらいま
しょうか？」

笑顔のカイだが、男達は震えていた。

声も出なかつた。

「あの親子に手を出したら、沈めるぞ。」

カイは急に真顔になり睨み付けた。

男達は逃げるよつに、車を走らせた。

「よし、じゃあ帰るか。」

青龍会の車に乘ろうとして、ふとリオの家の窓を見た。

そこには、笑顔で手をふるリオがいた。

次の日、学校に行く途中でカイとリオは会った。

「カイ、本当にありがとうね。あのあとで、立ち退き業者から電話かかってきて、この話はなかつた事にしてくれって逆に頼まれたよ。その夜、久しぶりに台所で三人でご飯食べたんだ。お父さんたちさ、少し照れていた。」

リオは嬉しそうに話した。

「そつかあ。」

カイはリオの肩に手を置きながら、笑った。

「そこのお一人さん。朝から、仲よろしいね。突然声がして、振り向くと後輩達がいた。」

「べつに……」

リオは照れると、下を向いた。

「カイも何か言つてよ」

ふとカイを見ると、

「これスッゲー」

おもちゃ屋のまえにいた。

「はあ～。少しば見てくれないかな。」

リオは小声で言つと、カイを見て笑つた。

第6話 本家の連れ（繪書も）

少し長めです m(—_—)m

第6話 本当の強さ

「コツシャー！ 遊びに行こうぜ」

ワタルやシノブ達は、1日の終わりを喜んだ。

「カラオケ行こうぜ。」

突然、カイが出てきて周りを驚かせた。

「いつの間にいたの？」

いつもの日常的な行動だった。

たけは、イスから立ち上がると

「わらい、今日はバスする」

そう言って、去っていった。

「最近付き合い悪いな」

シノブ達は、たけを見て言った。

「もしかして…」

後輩達は顔を見合せると、ニヤニヤした。

「あいつ… もしかして1人で楽しい事してやがるな。実は、お菓子食べ放題のお店に行つてるとか」

カイは本気で思つた。後輩達は、全員ため息をはいた

「カイ兄じゃあるまいし… あれは、女だよ」

後輩達は、たけに女が出来たと思いにやけた。

「いや、ただバイトか何かしてるんじゃないのか？」

タカシとリョウは冷静に話した。

「食べ放題だ」

カイは自分の思いを曲げようとしなかった。

そんな訳で、みんなで次の日、たゞけへ後をついて行く事にした。
「しかし、こんな裏道に行って、やつぱり女とデートだな。たゞけ
も意外とやるな」

たゞけは、〇〇〇一で女には冷たい男だ。しかし、後輩の中では
モテる方だったのだ。

「（）に食べ放題の店があるんだな。」

カイはまだ、食べ放題の店がある事を信じていた。

「それはいいけど、何でカイ兄は、そんな格好してるんだよ」
ワタルはカイの格好を見て突っ込んだ。緑のコートにスーツと。ま
るで、『踊る大捜査線』の刑事だ。

「おつ入つたぞ」

たゞけは、一つのビルに入った。

恐る恐るみんな入つて行くと、目の前の光景に驚いた。

そこは、ボクシングジムだった。

「何で？」

と思ったら、着替えたたゞけが出てきた。
とつさに隠れ見る事にした。

大きなサンドバックをひたすらに殴りつけるたゞけ。その一生懸
命さに、みんな真剣に見ていた。

何も言わずにジムを後にした。

「驚いたな。たゞけがジムに通っていたなんてな」
カイはたゞけの意外な場面を見て嬉しかった。

「そういえば、たゞけの親父もプロボクサーだったよな」

「そうだ。昔に雑誌に乗っていたよな。」

シノブ達は、カイに説明した。

「まつ。何かに真剣になることはいいことだ。」

カイはたゞけへを誇りに思い歩いた。

それから、一週間後。

たゞけへには知らないフリをして、遠くから見守った。

夜、カイは家の用事で街にいた。

ふと、たゞけへが通っているジムの前を通ると、たゞけへがいた。

「ちょっと止まって」

カイは、運転手に言つと、たゞけへの前に行つた。

「カイ兄。」

カイはたゞけへに、知つてゐ事を話した。

「そうか。知つてんだ。」

「しかし、お前見直したよ。やっぱり俺の後輩だな」

カイは笑顔で言つた。

「別に…」

相変わらず、こよないたゞけへだが、カイは嬉しかつた。

次のひ。帰りの駅にいると

「大変大変！！」

またシノブが走つてきた。

「どうしたの？シノブちゃん」

カイは赤ちゃんと話すように聞いた。

「もう、キモイ。」

そんな事よりも…」

カイは、シノブの言葉に傷ついた。

「オレキモイのか…」

カイを無視しながらシノブは話した。

「たゞけ～のさ、通つてるジムなんだけど、乗つ取られるんだって
や。」

「どういう事だ？」

リョウは聞いた。

「よくは知らないけど、今月末には取り壊されるみたい
「じゃあ、たゞけ～は何でまだ通つてるんだ」
みんな疑問に思つた。

そんな時にたゞけ～が来た。

「何を話してんのだ？」

シノブ達は話した。

「ああ、知つてるよ。だから、通つてるんだ。」

全員わけが分からなかつた。

「たゞけ～、お前もしかして…」

カイは急に、立ち上がり聞いた。

「オレが強くなつて、あのジムを奪い取るんだ。」

たゞけ～は、そう言つて電車に乗り行つた。

「奪い取るつて、1人で出来るのかな？相手は、大勢だよ
ワタル達は、心配したがカイがいる事に気づいた。

「カイ兄。また助けてくれるんでしょ？」

シノブは、カイに話しかけると

「嫌だ。今回は手は出さない。」

そう言つた。

「何で？たゞけ～が危ない目に合つとしてるんだよ？」

「これは、オレ達には関係ないからな」

カイは、そう言って離れて行つた。

疑問に思いつつ、その日をあとにした。

その夜。カイは、青龍会の連中にあるジムの事を調べてもらつていた。

「若。これが買い物の奴らです。そして、コイツが主犯者です。」

一枚の写真を見せた。

カイは見て驚いた。

「これは…」

カイは写真を持ったまま震えた。

「しかし、コイツは今。行方がわからず、止める事は出来ません。」

ホッとしたが、カイは胸騒ぎがした。

次の日、たゞけへ呼び出した。

「お前、本当に奪い取るつもりなのか？」

公園のベンチに座りながら、カイは聞いた。たゞけへはゆっくりと深呼吸して話した。

「俺の親父さあ、あのジムの出身なんだ。小さい頃に一回連れて行かれた事があるんだ。初めてよ、親父の強い所見たよ。かつこよくてさ、オレもなりたいって思つた。

今どこにいるかも知らないけど、あのジムにいるとさ、いつか会えるんじゃないかな?って思えるんだ。だから、何がなんでも、あの場所は守るんだ。」

たゞけへは、胸の内を話した。

カイは、ぐつと拳を握ると

「しかしなあ、強くなるって言つても…」

カイの言葉を割るよう

「カイ兄達には、迷惑かけないよ。これでも、強くなつたからよ。オレが一人でやつてやる。」

カイは、悲しい目をした。

「たゞけ、こんな事で強くなつても、誰も喜ばないぞ。痛い目にあつのはお前だぞ。こんなのは、強さじやない」
カイの言葉を無視しながら、たゞけは歩いて行つた。

「誰に何と言われても、力が強ければ、それでいいんだよ」
わかつてもらえず、離れて行つた。

そして、その日は来た。

「カイ兄。何やつてんだよ。」

シノブ達は、カイに怒鳴つた。

「何で止めに行かないんだよ。」

黙つたまんまのカイだ。

「もういいよ。オレ達は行く」

シノブ達は、たゞけのもとへ行こうとした。

「待ちやがれつて言つてんだよ。」

あまりにも、怖い顔でカイは怒鳴つた。

「今行つて、たゞけは助かる。だが、そこで何が変わるんだ。力で止めたつて、何も変わらねえんだよ。本当の強さは、力だけじゃない。」

シノブ達は返す言葉がなかつた。

一方、ジムには数人の男達が来ていた。

「さつさと、渡しな。じゃないと痛い目にあつぞ」
高笑いして、ジムをめちゃめちゃにした。

「お前らを絶対に倒してみせる。」

ガンとしてたゞけゝは動かなかつた。

「威勢のいい少年だが、容赦なくいくよ」

男達は一斉にたゞけゝを殴りつけた。

たゞけゝは、抵抗したが、勝てるわけがなかつた。

一時間後。ジムはめちゃめちゃになり、たゞけゝは体中に傷だらけで倒れていた。

「弱い者は、おとなしくしておきな」

男達は、笑いながら去つて行つた。

場面は変わり、シノブ達はたゞけゝを待つていた。
そこにたゞけゝは来た。

ボロボロな体を支えながら、みんなに近づいた。

「大丈夫か？」

心配しながら、たゞけゝを支えた。

「参つたよな。何もできなかつたなんてよ」

笑いながら、たゞけゝは言った。

「カイ兄の言うとおりだつたな。オレ、力に溺れていたよ。力だけじゃなく、心も強くなければ、意味なかつたな。ダサいなオレ…」

笑いながら、カイの前を通り過ぎた。

「バカ…」

カイは顔をあげ言つた。

「泣くぐらいなら、これから強くなりやがれ。たゞけゝ！！！」

後ろを向きながら、たゞけゝは泣きじやくつた。

「わかつてゐるよ。絶対強くなる。誰よりも…負けない…ぐらいに…

今度は負けねえよ。親父を超えてみせる…」

泣き声で叫んだ。

シノブ達は、初めて見るたゞけの涙に驚いた。

「さてと…あとは任せろ。」

カイは立ち上ると、どつかに行つた。

「ここは、たゞけのジムだ。」

1人の男が笑みを浮かべながら立っていた。

その後ろにカイはいた。

「なぜだ。なぜお前が…」

男は振り向いた。

「これはこれは…青龍会の跡継ぎさん。鬼澤さん」

「てめえ、息子が必死に守つてる所だぞ?」

この男は、たゞけの父親だった。

「あいつは、オレの息子だが、今はオレはここ」の新土地主だ」

そう、主犯者はたゞけの親父だった。

「なら、しかたないな。」

カイは、たゞけの親父と対立しようとした。

「まあ待てよ。誰も、あんたらと対立しようとしてるわけじゃない。」

「カイは、わけが分からなかつた。」

「実はよ…ここは狙われているんだ。だから、オレが買つた方が、
あいつが傷つかずすむんだよ。」

ますます分からなかつた。

「誰にだ?」

カイが聞くと同時に、銃声が鳴った。

とつさに身をまるくしたが、その前に、何かが被さった。

目を開けると、たゞけの親父がいた。

「おい！」

たゞけの親父は、銃弾を浴びていたのだ。

「あいつか？」

カイは走り、銃を持っていた男を殴りつけた。

そして、親父さんのもとにまた戻った。

「今待てよ。救急車を…」

カイが行こうとすると、親父さんは止めた。

「いいんだ。これで…

俺は、たゞけに何もしてやれなかつた。あいつの姿をさつき見て嬉しかつたよ。強くなつてさ…」

今にも死にそうな声で話した。

「あいつは、てめえを待つてるんだよ。生きて、あいつを誉めてやれよ」

カイは必死に叫んだ。

しかし、親父さんは首を振り言つた。

「すまないと言つてくれ。それと、このジムはまだ買い取つてない。

」

そして、一枚の権利書をカイに渡した。

「たゞけを頼むな」

静かに目を閉じ、息絶えた。

数日がたち、カイは本当の事を言えずに入った。ジムは、元通りに再開して、たゞけは通っていた。

「カイ兄。」

カイの姿を見ると、たゞけは近づいてきた。

「よつどうだ?」

カイは明るく笑った。

「今日す」に事聞いたよ。「一チがさ、あの事件の後に、ある男が来て『ここは、オレが守つてやる』そつ言つたみたいなんだ。それがさ、親父だつたつてさ」

たゞけは嬉しそうに話した。

カイは、真実を知らないたゞけを見てると、胸が痛かつた。

「親父、どこにいるかな? やっぱりすげーよな。オレが守れなかつた所を守つたんだからよ。早く会いたいな。

ねえカイ兄、また会えるよな」

たゞけは、とびつきの笑顔で言つた。

カイは拳を強く握ると

「ああ、すげーよな。お前の親父は…

その親父を早く超えてゆけよ。そうすれば、また会えるぞ。必死に笑顔で言つた。

「オレ、超えてみせるよ。親父を…

そしてまた、大切なものを守るんだ。今度は心も鍛えてな。たゞけは、今まで見せた事ない笑顔で答えた。

純粹な子供みたいに。

その夜。カイは一人公園にいた。
ケータイを取り出しリオの番号を押した。

「もしもし？」

リオは元気に出た。

「リオ……」

声を聞いた瞬間カイの中で何かが切れて泣いた。

「カイ? どうしたの?」

「オレ……今日ウソついた。たゞけくによ。親父に会えるなんてさ…
オレ……ウソついたんだ。あいつの……悲しい顔なんか見たくないくて
よ……ダメだよな……」

カイは、声をつまらしながら言つた。

内容を少しわかるリオは

「そつか……カイは悪くないよ。たゞけくのためについたんだからさ。
大丈夫だよ。ね?」

カイはリオの優しい声に安心して泣き続けた。

夜の公園には、カイの切ない泣き声だけが聞こえた。

一週間が過ぎ、また変わらない毎日が始まった。

「ヨツシャ～。遊びに行くぞ～」

またカイの元気な声が響いた。

「つたく…いつもつるさいよな」
ワタルは、耳をふさぎながら言った。

たゞけは、ふと笑うと
「つるさいな。バカだし子供っぽいし…でも、最高の兄貴だよな」
そう言って、こっこに歩いて行った。
その言葉に、後輩達やリョウウ達は驚いた。

「オレらの、最高の兄貴だ」
たゞけは心の中で思った。

第7話 鬼澤家の血筋

「これで、よし」

カバンに荷物を詰め込み、カイは一息ついた。

「カイ、本当に大丈夫なの？」

隣でリオは聞いた。

「大丈夫だよ。それより、みんなをよろしくな」

リオに笑顔で言うと、お風呂を入りに行つた。

一週間前。

その日のニュースに青龍会は緊張が走った。

「臨時のニュースをお伝えします。今日未明何者かによって、南地区刑務所が襲われました。

警官ら数人が重傷をし、脱走した者もいると思われます。脱走した犯人は、小笠原虎鉄…」

朝食を食べていたカイ達は驚いた。

「あいつが…」

小笠原虎鉄というのは、一年前にカイと青龍会らが倒した相手だ。剣術の達人で力に酔いしれ、なりふりかまわず人を斬つていた。青龍会の噂を聞いた小笠原は、力試しに対立したが、何とかカイ達が止め刑務所に入れた相手だ。

「マジかよ。またあいつ、悪い事するんじゃね～のか？」

カイは、心配した。

「出て来たとなると、狙いは若じやないですか？」

「ああ、絶対また送り返してやる」

カイは、決意をすると学校に行き、ひとまず後輩達やリョウ達にも話した。

「その事件なら知ってるよ。たしか、負傷者をかなり出したんだよね」

シノブは、言った。

「ああ、オレら青龍会がてこびつた相手だ。多分でオレを狙つて来る。」

カイは、真剣な表情をした。

「じゃあ、カイ兄が狙われてるって事なら、オレらも危ないんじゃないかな？」

たゞけは、カイに聞いた。

「その事なら大丈夫だ。オレらが守るからよ。でも、オレ来週から青龍会の用事でいないんだ。だから、オレらの所に来てくれ。」

カイの提案で、後輩達やリョウ達とりオは青龍会の事務所に来る事になった。

「よし、宴会だ～」

カイは、宴会場で叫んだ。

「つたく…こんな時に宴会だなんて。立場を考えろよ。」

タカシはあきれた。

しかし、カイは無視をして騒ぐ出した。
状況も考えずに騒ぐカイ達。

宴会は夜中まで続き、さすがに疲れたみんなは眠っていた。
カイは一人起きて、夜空を見ていた。

小笠原の事とか後輩達の事とか自分自身の事とか考えていた。

「カイ兄？」

眠たい目をこすって、ワタルが起きて来た。「起きたの？」
カイは、ワタルを隣に座らせると一緒に空を見た。

「カイ兄、小笠原つて強いの？」

何気なく聞いた。

「まあな。一年前はオレらでも、必死で止めたぐらいだからな。
怖いか？」

「怖くはないけど…でも、カイ兄がいるから安心できる。」
ワタルは、寝ぼけているのか本音を話した。

「そつか…」

カイは少し微笑んだ。
急に背伸びをすると

「本当に平和だな。このまま平和に楽しく暮らしたらな。」

そう言って、黙った。

「うん…カイ兄、またみんなで騒ぐうね。」

ワタルはカイに向かって笑った。

「ああ…その前に小笠原を止めなきゃな。絶対にオレが、命をかけてでも守つてやる」

カイは、真剣な表情をした。

その後ろで、他のみんなは聞いていた。そして、また眠りについた。

そして、カイは青龍会の新組長の就任式で出掛けた。

「じゃあ氣をつけろよ。」

そう言って、去つて行つた。

カイが行つてから何も事件らしい事は起こらなかつた。

したがつて、みんな普通に過ごしていた。

その日、リオは学校の帰り道でワタルと会つた。

「何も起きないね。」

「う…うん」

ワタルは、カイが行つてから少し元気がなかつた。

「ワタル?どうしたの?」

リオは、心配になり聞いた。

ワタルは少し黙ると、

「何でもないよ」

そう言って笑つた。

「そう…」

リオは心配しつつ、何も聞かなかつた。

帰り道、普通に話していると後ろから声がした。

「おい…」

振り向くと同時にワタルが殴られた。

「何するの?」

ふと向くと、みた事ある顔、ぶれだつた。

「あんた達は…」

それは、かつてカイと対立した、ブラックエンジェルだつた。

「約束はどうしたんだ」

ブラックエンジェルはワタルに聞いた。

「何度も言つてるだろ？…絶対にカイ兄は出さないって
ワタルは強氣で言つた。

「なら、しかたないな。」

そう言つて、ワタルを連れて行つた。

「ワタル…」

リオは、後を追いかけた。

とある空き地に行くと、真ん中に男が立つていた。

「連れて来ました。」

ブラックエンジェルは男にワタルを渡した。

「坊や、鬼澤を早く呼べよ」

男はワタルに言つた。

「誰が、呼ぶもんか」

ワタルは意地になり拒否した。

「ワタル」

リオが後から出てきた。

「こりゃあ、可愛いお姉さんだな」

男はリオに近づいた。

「あんたは…小笠原」

男は小笠原だつた。

「どういう事?」

リオは疑問に思つた。
「ごめん。りい姉。カイ兄には黙つてよ。こいつら、カイ兄を探しているんだ。」

ワタルは、リオに話した。

「じゃあ、カイに連絡して来て、倒してもらおうよ」
リオは携帯を出したが、ワタルが取り上げた。

「ダメだ。カイ兄には言わない。」

「何で? このままじゃあ、やばい事になるよ」

リオは必死に説得したが聞かなかつた。

「今、カイ兄は大変なんだ。家の事とかもあるから…これ以上迷惑
かけられないよ。
だから、オレが止めてみせる」

ワタルは、カイには言わないので1人で解決しようとしていた。

「でも…」

リオが言いかけると

「話はすんだか? さつさと、鬼澤を連れてきな。さもないと…」

そう小笠原は言つと、刀を出した。

「イヤだね」

ワタルが言うと同時に小笠原が向かつてきた。
わき腹に、刀のさやで殴られた。

「早く、出さないと… もつとひどくなるぞ」

ワタルは、何も言わずに笑つた。

「カイ兄は、今までオレらを守つて来たんだ。今度はオレが守るんだ。」

そう叫んだ。

小笠原に立ち向かつて行つたが……

「ガキが……」

小笠原は容赦なく、斬りつけた。

「ワタル……！」

リオの声が響いた。

血まみれになつてワタルは倒れた。

「こいつには、もう用はないな。
じゃあ、お前に来てもらおうか……」

ブラックエンジェルの連中がリオを掴んだ。

「離してよ。」

リオ一人が抵抗しただけでは、かなうわけなかつた。

「いい姉……」

ワタルは、もうううとする意識の中発したが、すぐにまた氣絶してしまつた。

車から降りると、カイは走つた。

廊下を奥に進むと、みんながいた。

「ワタルは？」

息を切らしながら、聞いた。

その瞬間リョウはカイを殴った。

「てめえ…何やつてんだよ。何が守る…何が守つてやるんだよ。」

突然の事で周りは静かになつた。

「！」めん…

カイは起き上がりながら言つた。

「カイ…お前だけを責めるつもりはないけど…
守るつて決めたんなら守つてやれよ。こいつは1人で戦つていたん
だぞ。お前を守るために…
リオも誘拐された。お前…青龍会とオレら何が大切なのかよ

タカシは、リョウを止めつつ言つた。

2人は、カイと同じぐらいに後輩達を大事に思つてる。
だから、やり場のない悔しさをカイに当つた。

カイは黙つた。

病室のベットで眠るワタルを見て、ゆっくりと離れて行つた。

「カイ兄…」

初めて見る、カイ達のケンカに後輩達は何も言えなかつた。

その夜。

カイは1人、ワタルの病室に来た。

「カイ兄？」

ベットの上でワタルは目を開けた。

「ごめんな。ワタル。」

カイはワタルの頭をなでると、ワタルはゆっくり首を振った。

「カイ兄のせいじゃないよ。オレが勝手にしたから、こんな事になつて……」

「いい姉も連れて行かれて……」

ワタルは泣きそうな声で言つた。

「大丈夫だ。リオは助け出す。」

カイは、そう言って笑つた。

そしてゆっくりと、歩いて行つた。

「カイ兄」

ワタルがふと呼んだ。

振り向くと

「カイ兄…無理しないでよ」

ワタルは心配そうに言つた。

優しく微笑み、ゆっくりドアをしめた。

一方、ブラックエンジェルと小笠原に連れて行かれたりオは

「早く離しなさいよー！！」

両手や両足を縛られて動けなかつた。

「鬼澤が来たら離してやるよ。」

小笠原は笑みを浮かべ、刀をリオに近づけた。

「おとなしくしておかなきや、一度と鏡が見れなくするぞ」

リオは恐怖を感じた。

その時、奥から音が聞こえた。

「やつと来たか」

小笠原は立ち上がって行つた。

「カイ…」

リオはカイの姿を見ると安心したが、何か違和感を感じた。

「久しぶりだな鬼澤…」

カイはブラックエンジェルに囲まれ、それでも黙つていた。

「どうした？天下の青龍会の跡継ぎは、恐怖で何も言えないのか？」

そう小笠原が言つと、全員笑つた。

一瞬にして、カイは近くにいた男を殴りつけ、氣絶させた。

「つべこべ言わずに、さつさと来いよ。楽しもつぜ。」

何かが変だつた。

「やつとやる気になつたか。」

小笠原はカイを見ると、刀を出した。

「おもしろい。今こそ決着つけようぜ。鬼澤…」

対立が始まつた。

病室では、ワタルは何かを考えていた。

「よつどつしたんだ」

みんなは、ワタルの部屋に来た。

「ねえ、カイ兄は？」

ワタルは聞いた。

「さあ？ またどつかに行つたんじやないのか？」
リョウは言った。

「カイ兄… やばいよ。絶対にあいつの所に行つたんだ。
あいつ… カイ兄を殺すって」

ワタルは、そう言つと、ベットから起きた。

「おいおい、どこに行くんだよ？ カイなら平氣だつて
リョウはワタルを止めた。

リョウの言葉を無視をしてワタルは話した。

「違うんだ。何か変だつたカイ兄…
何かカイ兄がいなくなる氣がするんだ」
ワタルは涙をためながら言った。

リョウ達はカイの元へ行つた。

(頼む… この胸騒ぎが勘違いであつてくれ)

リョウは走つた。

カイがいるであろうと思った場所へついた。
ブラックエンジェルだと思われる奴らがボロボロになつて倒れていた。

タカシはリオを発見し、声をかけた。

「リオ」大丈夫か？」

リオはタカシらを見つけると、急に叫んだ。

「見ないで。早く逃げて」

リオの呼びかけの意味がわからなかつた。

「誰かいるぞ。」

リョウは何かを見て警戒した。

ゆっくりと近づいてくる。

突然、何かを投げつけ、それはリョウ達の前に落ちた。見ると、小笠原だった。

「た…たす…けて」

体中が傷だらけの小笠原は、そう言いつと、気絶した。

「まさか…カイ？」

リョウの予感は的中した。

奥をよく見ると、カイがいた。

「カイ兄。」

シノブが近寄るのとするといふと、リョウは違和感を感じた。

「行くな」

リョウの声でシノブは立ち止まつた。

カイがゆっくり、リョウ達を見ると、全員寒気がした。

カイだけど、まるで別人かのようだつた。

恐怖を感じ、ただ立つてゐるだけ精一杯だつた。

カイはリョウ達を睨みつけながら、しばらくすると倒れた。糸が切れたかのように全員、カイの前に行つた。

ひとまず、カイを連れて青龍会の本部に帰つた。

寝てゐるカイを見て、みんな何も言えずにいた。ゆつくりとカイが目を覚ました。

「みんな… オレ何で…」

カイは何も覚えてない様子だつた。

「カイ… 何だよ。あれは…」

タカシは聞いた。

カイは少し下を向き、話した。

「オレでもわからないんだ。たまに、オレじゃないオレがいて、気づかぬいうちに…」

そう言つと、布団を握りしめた。

「きつと… オレの中の鬼澤家の血が出てきてると思つ。」

カイが言つと、もう誰も何も聞かなかつた。

一週間が過ぎ、ワタルも退院した。

「よつしゃー、退院祝いやるか」

そこには、いつものカイがいた。

あの日以来誰も気にしてなかつた。

カイの中の鬼澤家の血が、これからカイ達を苦しめるとも知らずに

:

第8話 仲間のために

「お~い、早く行こ~うぜ」
ホクトはみんなに呼びかけた。

小笠原の事件から2ヶ月たち、あれから何も事件らしい事件は起きてなかつた。

後輩達は、みんなでゲームセンターに遊びに来ていた。

「ヨツシヤー！またオレの勝ち」
たゞけとシユーティングゲームで楽しんでいたトキは、大声で叫んだ。

「くつだらねえ」

相変わらず、こ○○なたゞけは、一人外に出た。

「もう、終わるのかよ。じゃあオレ、人形でも取ろう」
トキは、近くにあったコーカフオーキャッチャーで遊んだ。

その帰り道。

「カイ兄達って、いつ帰つて来るのかな？」
シノブは、ふと聞いた。

先月から、カイとリョウとタカシは県外に、就職の面接で行つっていたのだ。

「最近、事件とか起きないよな」

平和ボケをしているのか、つまらなさそつだった。

突然、一台の車がトキ達の前に止まった。

「このなん所で寄り道ですか？」

窓を開け、顔を出したのは、カイの下つ端の小早川だつた。
「久しぶりですね！どうですか？これから、事務所の方へ行きませ
んか？少し、話もあるので」

小早川のすすめで、トキ達は、カイの実家に行つた。

「相変わらず、ドキドキするよな」

たゞけ）は、慣れてないのか、まだぎこちなかつた。

出されたお茶やお菓子を食べながら、小早川は、みんなに話した。
「みなさんも、見たんですね。若の裏の姿を…」

みんなは、急に手を止め黙つた。

「見たなら、仕方がないです。若は、時々頭に血が登ると、別人み
たいになるんですよ。あの極道大戦争の時も…
我々も、心配なんです。あのままなら、若は優しい若じやなくなり、
ただ、人を傷つけるだけの殺人マシンになつてしまつ…」

みんなは、黙つたまま聞いた。

「率直に、お願ひします。これ以上、若や青竜会に関わらないでく
ださい。」

みんなは、意外な事に驚いた。

「若是、この青竜会にとつて大切な跡継ぎです。このまま、普通に
は暮らしていく不可以ないんですよ。どうか、わかつてください。」

小早川は頭を下げた。

みんなは、黙つたままカイの実家を後にした。

「どうする？」

たゞけは聞いた。

「どうするって、今は考えられねーよ。カイ兄がいなくなるなんてよ」

シノブは、泣きそうな声で言つた。

跡継ぎなのは分かる。いつまでも一緒にやないつて言つのも分かる。でも…

それぞれ、黙つたまま、歩いた。

みんなと別れ、トキは家に帰つた。

トキの家は、親が貿易の会社を設立しているので、かなりの大金持ちだ。家政婦達が出迎い、トキは黙つたまま奥のリビングに行つた。

父親らしき人が、スーツを着ながら出でてきた。

「帰つたのか？」

冷たい目でトキを見た。

しかし、トキは黙つたままコップで水を飲んだ。

「3ヶ月ぶりに会つて、相変わらず愛嬌がないな。まるで、父親にそつくりだ」

トキは、ダンとコップをテーブルに置くと、

「あんたが、無事に戻つて来てがっかりしたよ」

そう言うと、自分の部屋に戻つて行つた。

部屋を開けると、荷物が全部ない事に気づいた。タンスもベットも全部なく、ガランとしていた。急いで、あの男の所に行つた。

「何だよ。何で何もないんだよ」

男は、笑みを浮かべると

「来週から、お前は、オレの会社を継ぐためにアメリカに行つてもらう。余計なものは、捨てた。

それと、今連んでる奴らとも縁を切れ。」

トキは、あまりにも突然の事で驚いた。

「そんなの勝手に決めんじゃねえよ。第一、お前の会社じゃねえ、父さんの会社だろうが」男は、トキの顔を見ると、笑い

「今はオレの会社だ。」

そう言つと、家を出て行つた。

トキは、拳を握りしめ、ただ立つていた。

次の日。

学校に行くと、またトキは驚いた。

あの男が退学届を出していたのだ。

もちろん、みんなにも知れ渡つた。

「どういう事だよ。急に辞めるなんてよ……」

たゞけはトキに聞いた。

トキは、少し下を向き話した。

「オレの父親だ。義理のだけどな。本当の父親の片腕として、会社を経営していた、あいつは父さんを裏切つて会社を乗つ取つたんだ。その日、オレの両親は事故で亡くなつた。あいつが、跡継ぎとしてオレを引き取つたんだ。実は、会社を引き継ぐためにアメリカに行つて。」

たゞけは驚いた。

「お前は、行くのか？」

たゞけは恐る恐る聞いた。

「行きたくねえよ。あいつが、父さん達を殺したんだ。そんな奴とは一緒にいたくない。」

少し安心したみんなは、何とか校長に頼んでみると、校長室

に行つた。

ドアを開き、中に入ると、一人の男がいた。

「貴様、何しに来やがつた。勝手な事しやがつて
トキは男の胸ぐらをつかみながら言つた。

「言つたはずだ。お前はアメリカに行つてもううつてよ
状況から見ると、この男は、トキの義父だ。

「オレは行かない。家も出る。」

トキは手を離すと、みんなの前に戻つた。

「そんな奴らと連んでるから、カスになるんだ。」

男は、睨みつけた。

「さつきから聞いていれば、好き勝手な事言いやがつて。トキが行
きたくねえんなら無理矢理行かせんじゃねえよ。こいつは、オレら
の大切な仲間だ。絶対に行かせない。」
たゞけは、強気に出た。

だが、男はニヤリと笑うと

「ほう、我ら西条会に刃向かうのか？たかが、カスのくせによ
「てめえらが、誰であろうと関係ない。」

お互いににらみ合つた。

男は黙つて、ドアの前に行くと
「どうなるか、覚えておけよ
笑みを浮かべながら去つて行つた。

その帰り道、トキは少し不安だつた。
「あいつ、何するか分からぬよ。」

不安そうな顔のトキを見てたゞけへは言つた。

「大丈夫だ。オレらが守つてやるよ」
駅に着くと、いつものたまり場に行つた。
しかし、いつもとは違つていた。
カギがかかっていたのだ。

「何だよ。タバコ吸えねーじゃないか。」

ワタルはドアを蹴飛ばした。

「何やつているんだ。」

駅員が出てきて、怒鳴りつけた。

「お前らか？ここでタバコを吸つたり、飲酒をしたりする高校生つてのは、これからは、駅を立ち入り禁止だ。」

駅員は、そう言つとブツブツ何かを言いながら去つて行つた。

「んだよ。昨日までは見ても無視していたくせに…」

仕方なく、別のたまり場へ行つた。

行く途中、いつものように街を通ると、何か違和感があった。
それ違う人は、ジロジロと見て何か話していた。

「何か、オレら悪い事したか？」

不思議ながらも、歩いて行つた。

たまり場に着いてもトキはまだ、落ち込んでいた。

「何だよ。そんなに暗い顔するなつて
シノブは、トキを元氣づけようと物真似をしたが反応はなかつた。

（氣まずい雰囲気のまま一時帰る事にした。）

トキは、家に帰るとまた西条に会つた。

「その様子だと、行く場所がなく戻つて来たな。」

トキは、西条を睨みつけた。

「あなたの仕業か？街にもどりこにも、オレらの場所を奪つた奴は。駅のたまり場も街の人の視線も、西条の仕業だつた。

「言つたはずだ。お前らはオレには勝てない。今頃、あいつらも後悔してゐるだろうな」

不適な笑みを浮かべながら去つて行つた。

トキは、イライラしながらも街をわざよつていた。

たゞけのジムの前に行くと声が聞こえた。

「何でだよ。ちょっと待てよ」

見ると、たゞけがいた。

「すまんな。」

一人の男が、たゞけに謝ると去つて行つた。

「何でだよ。これでオレしか残つてないじゃんかよ」

たゞけは、その場に立ち尽くした。

トキはすぐに分かつた。

(あいつが、ジムの人間を取つたんだ。)

トキは、拳を握りしめながら走つて行つた。

(オレのせいだ。) そう思いながら、走つて行つた。

次の日。

トキは噂で全て知つた。

たゞけのジムは、ジム生がいなくなり、駅は立ち入り禁止になり、ホクトと彼女は彼女の親が反対して会うことさえ出来ないでいた。

学校でも、あいつらとは関わるなといつ掲示板があり、みんなは落ち込んでいた。

しかし、トキには気づかれないよう元気で明るくしていた。

トキは、再び西条と会った。

「どうした？ オレの言つ事を聞くよつとしたか？」

西条は、一やりと笑つた。

「そうすれば、みんな元通りにしてくれるんだな？」

西条は、黙つて頷いた。

その夜。久しぶりにみんなと会つたトキは、
「飲もうぜ。久しぶりにさ」

いつもと同じトキだった。

それぞれ、イヤな事は忘れて楽しんだ。

朝方まで騒ぎ、みんなたまり場に泊まつた。

一人トキは、起きていた。

みんなの顔を見ると、

「オレ、今までさ…お前らというのが当たり前だと思つてた。バカで、いつも笑つてるお前らが好きだ。これからも、ずっと仲間だよ。」

涙をためて、今までの事を思い出していた。

そして、ドアの前に行くと

「バイバイ」

そう言つと、出て行つた。

昼になつて、みんなは起きた。

「昨日は飲んだな。頭いてえ」

シノブは、一日酔いらしく頭を抱えながら起き上がつた。

「トキは？」

ホクトが聞くと、トキがいない事に気付いた。

「まさかあいつ…」

みんな走つて、トキの家に行つた。

しかし、誰も出では来なかつた。

「アソコだ。」

たゞけは、船乗り場に走つて行つた。

その途中。ワタルが言い出した。

「オレらだけで大丈夫かな？カイ兄に言つた方が…」

ワタルの言葉を消すように、たゞけは

「ダメだ。オレらでやるしかない。」

たゞけは、前に小早川に言われた言葉を思い出していた。
船乗り場に着くと、すぐにトキを見つけ出した。

もうすぐ出航するようだ。

慌てて、みんなでトキを呼び止めた。

「みんな、何で…」

トキは、ガードマンの間からみんなの姿を見つけた。

「何やつてんだよ。お前、ここからの言われた通りに行くのかよ

必死で、ホクトは叫んだ

トキは、拳をにぎりしめ

「じめんみんな… オレ、やつぱり一緒にいられない。」

そう言つと、船の中に入ろうとした。

「お前、バカじゃねえか？ オレ達といたくないのかよ？」

たゞけゝは、ゆっくりと歩きトキに近づいた。

「オレがいたら、みんなが不幸になるんだよ？ オレのせいでのけへもホクトもワタルもみんな…」

トキは、泣きながら言った。たゞけゝ達は、ゆっくりと近づいたが、西条の合図で数人の男達が、間にに入った。

「連れ戻すなら、力づくにするんだな！」

一瞬戸惑つたが、たゞけゝ達は決心した。

「トキ、オレ達はお前が必要なんだ。オレ達をいつも、楽しませてくれてよ。だから、辛いなら言えよ。苦しいなら、助けを求めるよ。オレ達仲間だろ？ とにかく、今は連れ戻すからよ。だから…」

みんなは、男達を睨むと声を合わせた。

「すぐに終わらすから」

カイが、いつも言葉と同時に対立した。

「バカが、こいつらに勝てるわけないだろ？ あの青龍会の次に強い奴らだぞ？」

西条は笑みを浮かべながら見ていた。

たゞけゝ達は、ボロボロになりながらも必死で戦った。

トキはみるみるうちに、傷ついていく仲間を見ながら、

「頼む。止めてくれよ。あいつらには、手を出さない約束だろ?」

泣きながら言った。

「お前が、おとなしく行けばな

西条は、不適に笑った。

その意味がトキには分からなかつた。

「オレは、言つたよな? お前が、アメリカに行つたら、手は出さないでよ。ここは日本だぜ?」

意味が分かつた。まだ、アメリカに着いてないんだ。

「ひきょうだぞ。今すぐやめろよ。」

トキは殴りかかつたが、ガードマンに押さえつけられた。

「おとなしく、オレのまつとおつておけばよかったのによ。そんなところは、父親に似てるよな。まぬけな事故を起こした。バカな父親によ」

トキは、その言葉を聞いて確信した。

「お前が父さん達を……」

西条は、トキの顔をつかむと

「バカだよな。オレが用意した車に乗つてよ。ブレーキが使えない車に乗つて、人生終わつてよ。」

そう言つと、高笑いした。

「てめえ……」

トキは、ガードマンに押さえつけられながらも、睨みつけた。

一方、戦っているみんなは、体を起こすのが精一杯だった。

「くそ…強すぎるよ。」

ワタルは、傷だらけの体を支えながら起きた。

「やっぱり、カイ兄に言つた方が…」

シノブが言いかけると、

「バカやろう。カイ兄にまた迷惑かかるじゃねえか。これは、オレ達の戦いだぞ！オレ達で解決するんだ。」
たゞけは、また男達に向かつた。

「そのカイと言つやつが、どれほどもののかは分からぬが、こんな仲間を持つて可哀想だな。」

また殴られて、倒れた。

その様子を見ていたトキは、

「頼む。止めてくれよ」

泣きながら、西条に言つた。

「泣きながらの頼み事か、醜いぞ。」

トキを殴りつけ、髪を引き上げると、

「お前のせいで、奴らは痛い目にあつてんだよ」

トキは、悔しむで言葉を失つた。

急に、空き缶が西条に向かつて投げつけられた。

投げたのは、たゞけだ。

「そいつに手を出すんじゃねえよ。」

体はボロボロでも、必死に西条に言つた。

「カスが…今すぐ楽にしてやるよ」

男達に合図をすると、一人の男がたゞけに棒を向けた。

「何するんだよ。やめろよ」

トキは、助けようとするが捕まつて身動きが取れなかつた。
みんなも同じだつた。

「刃向かうとは、どうこう事になるか知つておけ」
男は、そう言つと勢いよくたゞけの右腕を折つた。

「ギャアアア」

たゞけの悲鳴と共に静まり返つた。

「見たか？これが、お前の仲間だぞ。哀れだな。どんなに頑張つても何も出来ないなんてよ。」

トキは、泣きながらも思つた。

(言葉にならない。悔しい…)

しばらく、黙つてゆづくじと西条と共に歩いて船に向かつた。

「トキ行くな。」

右腕を抑えながら、たゞけは叫んだが、

「じめん…」

トキは、歩いた。

「畜生。何も出来ないのかよ。たつた一人の仲間も助ける事が出来ないのかよ…」

悔しさで涙が出てきた。
(頼む…誰か助けてくれ)

みんなは、もう体を起こす事さえ出来なかつた。

「トキ…！」

たゞけゝが叫んだ瞬間、風が吹いた。

「困るなあ。」

誰かの声がして、みんなはすぐな気付いた。

「遅いよ。」

ワタルは泣きじゃくつた。

「何やつてたんだよ。」

たゞけゝも、涙を流しながら笑つた。

誰もが、安心した。

トキは、立ち止まり、振り返つてまた泣いた。

「やつと来た。カイ兄…」

男達が振り向いたその先には、カイがいた。

「誰だ？」

西条は、少し戸惑つた。

「つちの可愛い後輩達を泣かしてんじゃねえよ」

カイは、男達をにらみつけた。

「何やつてんだ。早くそいつも、始末してしまえ」
しかし、男達は動かなかつた。いや、動けなかつたのだ。

「ヤバい。」

男の一人が震えた。

「カスガ…」

西条は、トキを突き飛ばすと銃を取り出した。

「人を殺しても、金で解決出来るんだ。」

そう言つと、カイに向けた。

その瞬間、カイは西条の所に走りトキを捕まえた。

「もう、大丈夫だ。話はリオから聞いた。えらかっただな。」
カイは優しく微笑むとトキを抱きしめた。

安心感からトキは、泣いた。

しかし、西条の銃はまだカイを捕らえていた。
「正義のヒーローみたいな事してんじゃねえ」

間一髪の所で銃の玉はカイの横をそれた。

「今待ってる。後で、ぶつ殺すからよ」

そう言つと、睨みつけた。

西条は、携帯を取り出し、誰かに電話した。

「お前達、これで終わりだ。あの青龍会が来るんだからな。」

そう言つて、笑つた。

しばらくすると、一台の車が到着し、中から少し年を取つた人が降りて來た。

「鬼澤さん。あいつらです」

西条は、その人に駆け込んだ。が、それはカイのおじいちゃんだった。

「うちの孫が、どうしたのかな？」
すぐには気づかなかつたが、西条は驚いた。

「バカな…」

「これでも、トキは連れて行くのか？」

カイは西条に聞いたが、西条は逃げるように船に乗つて行つた。

「つたく…あまり、無茶すんなよ」

カイは、傷だらけの後輩達を見て笑つた。

「いいもの見つけたぜ。」

奥にいた怪しげな、男がカイ達を見ていた。

これから、カイと後輩達を巻き込む大事件の予感を残して…

第9話 絆

トキを、連れ戻したカイ達は、一旦カイの家に行つた。

「トキ、これからどうするんだ?」

カイは、いっぱいのお土産を後輩達に渡しながら、聞いた。
「ん~?まだ何も考えてない。」

トキは、西条と決別し行くあてがなかつた。

「オレの所来るか?ジムでバイトするなら、住み込みで雇つてやるよ」

たゞけは、トキに住み込みのバイトを提案した。

こうして、トキの居場所は決まった。

しかし、まだ一つ問題が残つていた。

「若、前にも話したとおり、今決めてください。他のものと縁を切
るか、青龍会の跡継ぎを切つて普通の高校生として暮らすか...」
周りが急に静まり返つた。

たゞけは、カイが決めたとおりにすると決めていた。

カイは少し考へ、

「オレは...みんなと離れたくない。跡継ぎはしない。」

後輩達の顔がにやけた。本当はカイにいて欲しかつたからだ。

「わかりました。」

小早川は、ため息を吐くと

「だそうです。会長」

奥に隠れていた、カイのおじいちゃんが出てきた。

「薄々感じていたがな。カイ、お前の人生だ。」の青龍会はワシの時代で終わりだ。しかし、安心するな。もし、お前が青龍会の伝承者とバレたら、一度と普通の暮らしには戻れない。それと、命も狙われる。だから、何があつても関わっていた事は内緒にすれよ。普通の暮らししがしたかつたらな。」

真剣な眼差しでカイに言った。

「分かった。」

カイは、決心した。もう、極道の世界には関わらないと。

次の日、みんなで学校に行くと、朝から先生達は慌てていた。

「あつちに、面白いものがあるわ。」

男子生徒が話してゐるのを聞いて、見に行つた。

掲示板に貼られているものを見て、みんな驚いた。

それは、昨日、西条らと対立している時の写真が貼られていた。

見出しへ、『現役高校生、ヤクザと対立！…』

と書かれていた。

「いつの間に、こんな写真が…」

みんな戸惑いを隠せなかつた。

すぐさま、先生が来て、カイ達は呼ばれた。

「これは一体どういう事かね？」

校長が聞くと、

「確かに事だ。しかし、オレ達は仲間を守るためにしたんだよ。たゞけは、必死に言つた。

「校長、ここからは仲間を助けるためにしてはいけないですよ。」隣にいた玖波が話した。

こいつは、カイ達を敵意しているからだ。

「てめえ、オレ達の何がわかるんだよ」ワタルが突つかかつた。

「全部わかる。喫煙。飲酒。不純異性行為。どれもしてるだろ？そんなカス共に、仲間意識などあるか？どうせ、ヤクザと連んで、いざこざが起きたんだろ？」

玖波は笑いながら言つた。

「てめえ、オレ達が嘘をついているところのかよ。ここからは、オレを守るためにしたんだ。なら、オレだけを処罰すればいいだろ？」

トキは、玖波にかかつた。

「とにかく、今日は帰りなさい。明日ゆっくり話せします。」校長の言ひとおり、帰つた。

「何だよ。あいつ…何もわからんねえくせに」とみんなの怒りはピークに来ていた。

「『』めんみんな。」

トキは、自分のせいだと思い、謝った。

「バカ。お前のせいじゃねえよ。」

たゞけは優しく微笑んだ。

次の日、臨時の職員会議が開かれた。

後輩達を連れて、カイやリョウ、タカシとリオも同伴した。しかし、カイ達は中に入れてもらえなかつた。

「何でだよ。オレ達にも責任があるんじゃねえか？」リョウは、先生達に言つたが聞いてもらえなかつた。

「お願いします。オレ達も入れてください。」カイ達の説得で中に入る事が出来た。

「昨日、先生達と話したとおりに、君たちは、高校生として、恥じるべき行為をした。」

玖波が、たゞけ達の周りを歩きながら言つた。

「それは、だから仲間を守るためにだつたんだよ。」ワタルは、何度も口にした言葉にあきれながら言つた。

「ほう、じゃあこれは何だ？」

玖波が一枚の写真を見せた。

それは、青龍会の事務所に入るたゞけ達の写真だった。

「これは…」

たゞけ達は、カイの事がバレると思い黙つた。

「青龍会といや、あの極道大戦争を始めた奴らだよな？なぜ、お前達が出入りしてるんだ？ん？もしかして、誰か知り合いがいるんじゃないのか？」

玖波はカイを見た。

「なんもの、決まっているだろ？。オレ達が知り合いなんだよ。悪いかよ。」

ワタルは、カイをかばい言つた。

カイは、黙つて見ていた。

「校長。ヤクザと関わっている生徒が学校にいたら、他の生徒が動搖するんじやないですか？」

校長は、少し黙ると

「たしかに…しかし、これでこの子達の人生を批判したら、あまりにも、厳しすぎる。全員、無期限の停学といつ」とこしませんか？」

校長は、みんなの将来を考え言つた。

「ダメです。ここは厳しくしないと、いけません。退学といつことにしましょう。」

玖波はまだ、たゞけ、達を陥れようとしていた。

「オレ達の話も聞けよ？

シノブが立ち上がり、言つたが

「お前達に話す権利はない。たかが、不良の集まりのくせに。」

全員、立ち上がつた。

「不良だから何だよ？たしかに、オレ達は悪い事ばかりしてるよ。だけど、仲間を大事にしてる事は、マジだ。不良だからってな、そちら辺の奴らと一緒にすんじやねえよ。」

たゞけ）は、玖波に怒鳴った。

しかし、玖波は無視をして

「では、退学という事でいいですね？」

先生達に聞くと、
頷いた。

「カイ、このままじゃ退学になっちゃうよ。何とかしてよ。
リオはカイに言つが、カイは黙つてゐただけだつた。

「ちゃんと話せよ。不良だからってな、話す権利もねえのかよー。」
ワタルが、玖波に近づこうとした。

玖波は、下っ端の先生に会図を送ると、全員捕まえられた。

「つまみ出せ。」

玖波の一言で部屋から追い出されようとした。

「待てよ。話を聞けよ。」

尚も、抵抗した。

「そいつらにさわんじゃねえ！！」

カイは急に立ち上がり、怒鳴った。

みんなの前に駆け寄ると、

「たしかに、お前の言つとおりだ。しかし、オレはオレの後輩達が
悪い事をしたとは思わねー。」

カイは玖波を睨みつけ、後輩達を連れて出て行つた。
カイの実家に来た。

「つたく、何だよ。あいつ……」

怒りが収まらない様子だった。

カイは黙つていた。何かを考えている様子だ。

「カイ兄。大丈夫だよ。オレ達、絶対にカイ兄の事言わないからさ。

「たゞけ」は、自信満々に言った。

「そうだよ。もし、カイ兄の事がバレたら、普通に暮らせないでしょ？オレ達、カイ兄とは一緒にいたいからさ。」「

ワタルは、照れながら言った。

次の日、またみんなで学校に行つた。

ちょうど、集会が行われていて、全校生徒集まっていた。

ドアを開けると、玖波は
「懲りずにまた来たのか？」

笑みを浮かべマイクで話した。

「話を聞くまでは来るさ。」

ざわつく会場で、玖波は全校生徒に説明した。

「こいつらは、あるまじき行為をした。よって、全員退学だ」「また、みんなで玖波に近寄り、言った。

「人の話も聞かずに、何が退学だよ。」

「話は聞いた。こいつらは、青龍会と関わっているんだよ。」

さらに、ざわつく会場。それもそのはずだ。まだ記憶の中に極道大戦争の事があるからだ。

冷たい視線が、みんなに向けられた。

カイは黙っていたが、急にみんなを見た。

そして、優しく微笑んだ。

その意味が、後輩達には分からなかつた。

「現場は、東にある船着き場。人数は、九人。我々、青龍会が落とし前を入れた時の状況です。」

一瞬、何が起こったのか分からず静かになつた。

「我々？」

玖波は、にっこり笑つた。

「あの日、じいづらは巻き込まれただけです。我々、青龍会に……」
そつと、服を脱いだ。

会場は驚いた。

背中に龍の入れ墨がある。それは、青龍会の証だ。

「カイ兄、何やつてんだよ。」

たゞけは、カイに近寄つた。その後からみんな來た。

「お前、何やつてんのか分かつてんのか？こんな事したら、じいづらいられなくなるんだぞ。」

リョウも、カイに言つた。

「こいつらはよ。夢があるんだ。」

意外な答えに黙つた。

「たゞけには、親父を超える夢。ホクトには、彼女を守る夢。シノブには、強くなる夢。わたるには、仲間を守る夢があるんだよ。オレ達に関わったからって、その夢をなくす事は出来ない。」

カイは笑いながら言った。

「でも、あれはオレを助けるために…」
トキは必死に言つた。

「いや、あれはヤクザの対立に、お前らが巻き込まれただけだった。」

カイは、笑顔で言つた。

「お前が、青龍会だったとはな。鬼澤君。校長、このようなものが学校にいたんじゃ、他の生徒が怖がつてしまします。騒ぎが起きてからじやあ、遅いんじゃないですか？」

「そうだな。」

校長は少し考えながら頷いた。

「オレ達が、巻き込んだだけだ。こいつらは何も悪い事していない。」

カイは、校長に聞いた。

「ああ。」

校長の領きを確認するとカイは黙つて出て行つた。

「カイ兄。」

シノブが呼び止めると

「来るんじゃねえ！」

カイは、怒鳴った。

そして、声を震わせ

「これ以上…オレ達に関わるな。関わったなら、オレは許さない。」

そうつ言って去つて行つた。

その夜。後輩達やリョウ達は集まつていた。

「何でだよ。」

やつきれない悔しさに、みんなイライラしていた。

「カイさ…昨日、私の所に来たよ。」

リオが話した。

「ずっと、みんなと一緒にいたつて言つていた。けど、現実は違う。極道のものと関わつたら、将来がダメになるんだつて言つていた。それは違つて言つたけど…」

みんな黙つた。

リョウは静かに口を開いた。

「あいつさ、いつも誰かのために助けていたけど…いつも、どうか悩んでいたよな。」

その言葉に、みんな黙つた。

次の日。

カイは何もせずに、家にいた。

「若、本当にいいんですか？」

小早川は心配そうに聞いた。

「当たり前だ。オレが決めた事だからよ。今からは、お前らの面倒も見ないとな」

笑顔のカイだが、少し寂しい目をしていた。

カイのおじいちゃんも、その様子を見ていた。

「カイ～！！」

突然、家中に響き渡るような声が聞こえた。

玄関に行つてみると、リオがいた。

「どうしたんだよ？」

かなり、急いで來たらしく息を切らしたりオに聞いた。

「大変だよ。たゞけ～達さ、カイが学校辞めるなら自分達も辞めるつて…今、学校に行つたの。」

カイは驚いた。

その頃、学校では先生達とたゞけ～達が話していた。

「もう、解決したのよ。これ以上、何も問題は作らないでほしいの。

」
若い教師が言った。

たゞけー達は、先生達を睨みつけた。

「オレ達の話しを聞くまでは動かねえよ。
たゞけーは、中央で立っていた。

「不良はどじでも不良だな。そんなに退学になりたければ、じじいで
暴れてみるか？」

玖波は、笑みを浮かべ挑発した。

「じじで、暴れてみてもいいけど、オレ達が退学になればカイ兄の
退学を取り消せ。」

ワタルは、言った。

二階で見ていた生徒は、小声で何か言つていた。

「ヤクザと連んでいるんでしょう？そんな奴ら辞めちやえばいいのに

…」

その声は、みんなに聞こえていた。

「ガタガタ言つてんじゃねえ！！文句あるなら降りて来いよ。
カイ兄はな、オレ達のために戦つていたんだ。オレ達の兄ちゃんの
悪口言つなら、相手してやるよ
周りは静かになった。

「てめえら、何やつてんだよ…！」

カイが来た。

「カイ兄。」

突然、カイが来たので、みんな驚いた。

「そんな事しても、オレは変わらないぞ。」

カイは、たゞ一瞬を見渡した。

「カイ兄、オレ達はカイ兄に助けられてばっかりだ。まだ、一緒にいたいんだよ。オレ達仲間だろ？」

シノブは少し泣きそうな顔で言った。

「やつぱりな、これがお前らの真実か？またここで、問題でも起こそ？」

玖波は、カイ達を見た。

「校長、なら全員退学という手はどうですか？」
校長は何も言わずに、カイ達を見ていた。

「こいつらは関係ねえよ」

カイは、まだ後輩達をかばっていた。

「カイ兄は、関係ねえよ。」

後輩達もカイをかばっていた。

周りに少しずつ動きが始まった。

「つたく…いつも、一人で突っ走んなよ」

後ろを振り向くと、リョウやタカシがいた。

「みんな…」

カイは驚いた。

リョウやタカシ、それに他の高校に行つた同級生が集まっているからだ。

「たまにはよ、相談ぐらうすれよな。」

リョウはカイに近づいた。

「何でここに…」

リョウは笑みを浮かべると

「おい、出て来いよ」

そう言って、奥から一人の男が出て來た。

「こいつから、話は聞いた。お前らはめられたんだよ。」

一同驚いた。

「どういう事?」

カイはリョウに聞いた。

「こいつ覚えてないか?トキを連れ戻す時にいた奴らの一人だ。あ
る男に頼まれてな。カイの正体を突き止める為に、対立させたんだ
とよ」

「ある男?」

カイは、ますます意味が分からなかつた。

「なあ、玖波先生」

全員玖波を見た。

「何言つているんだ?そんな男知らないぞ?」

玖波は笑った。

「そりゃ…じゃあ、こいつは何だよ?」
一枚の写真を見せた。

その男と玖波が、喫茶店にいる時の写真だ。

「知らん。お前らも退学にするぞ」

まだ白を切る玖波。しかし、突然、警察が来た。

「玖波良平さんですね? 傷害容疑で同行お願いします。」

玖波は愕然とした。

「まだ意味が分からぬけど…」

カイはリョウに聞いた。

「実はな、青龍会の人達に頼まれたんだよ。カイをお願いしますだけのジムの事件も全部、玖波が仕向けた事だつたんだよ。カイを追い出そうとしてよ。」

カイは思い出した。全部、誰かに頼まれてしたんだって言っていた。

「待つて、じゃあオレ達の事はナシって事じやん。」

ワタルは校長を見た。

「そうですね。カイ君もみんなの処罰は無効です。」

その言葉を聞いた途端に喜んだ。

「いいなあ何か…仲間になりたいよね」
カイ達の事はみんな認めた。

「若。」

小早川や青龍会の人達が来た。

「若、私たちは間違っていたみたいですね。若を苦しめていたのは私たちです。すいませんでした。
これまでどおり、皆さんも青龍会共々お願いします。」

小早川はカイとみんなが、一緒にいる事を認めた。

全員で、喜んだ。

しかし、いつまでも続く事はなかつた。

第10話 最終大事件

いつもの朝。いつもの時間。いつもと変わらない一日であるはずだった。

カイが学校に戻つて来てから一週間が経ち、何にも事件は起きず平和に暮らしていた。
しかし、この平和はいつまでも続かなかつた。

カイはニュースを見ていた。その映像に見覚えある風景が映つた。
ニュースを半分ぐらい見ると、走つて行つた。

着いた所は、カイ達の学校だ。
消防車や警察の方が来ていた。

ニュースで、カイ達の学校でテロが起きたらしい。
カイは、学校に着くなり、みんなを探した。

すると、少し離れた所でリョウ達がいた。

すぐに駆けつけた。

「大丈夫か？」

カイは慌てて來たので、普段着だつた。
「ああ、何とかな。みんな大丈夫だ。」
後輩達も全員無事なようだ。

カイは、燃え上がる学校を見て、愕然とした。

「誰だよ。」

ふと横を見ると、一人の若い男がカイを見て笑ってる。

「あいつか…」

カイは男を追いかけた。

「カイ兄。」

ホクトの声にも反応せず行つた。

しばらく、追いかけていると、どつかの工場に着いた。
中に入ると、男は立ち止まつた。

「てめえか？学校を爆破させたのは」

カイが聞くと、男は笑つた。

「さすが、鬼澤家の奴だな。」

カイは黙つて、男を睨んだ。

「青龍会伝承後継者、鬼澤カイ。お前を殺す。」

男はそう言つと、殴りかかってきた。

「なぜ、オレを殺すのかは、分からぬが、絶対に許さねー。」
カイも、男に突つ込んだ。

お互に殴り殴られの戦いをした。

男の蹴りが、カイのお腹に当たりカイは倒れた。

「くそ、てめえ何者だ。」

カイはお腹を抑えながら聞いた。

「オレ達に勝てたら教えてやるよ。」

奥からまた4人現れた。

「まだいたのか？答える。なぜ、オレを狙う。」

男達はカイを睨みつけ話した。

「五年前、てめえら極道の奴らが起こした、極道大戦争の被害者だよ。」

カイは少し驚いた。

「五年前までは、普通の暮らしをしていた。しかし、お前らのせいで人生が変わった。ここにいるオレ達は、それぞれ親や友達、兄弟をめぐらに奪われたんだ。あの戦争さえなければ、普通に暮らしで幸せに過ごしていたのによ。てめえらの勝手で幸せを奪われて、生きる事さえ辛くなつて……

お前らを殺すために、五年間必死で生きて來た。」

カイは、少し寂しい目をした。

「確かに、オレ達がした事は許されない事だ。でも、オレの周りの奴らは関係ねえ！！オレを殺すなら、オレだけを狙いやがれ！」

カイは、男達を見た。

男達は、にやつと笑うと

「バカじやねえか？お前にも、同じ苦痛を味わつてもらひうんだよ！
大切な人が、いなくなる苦しみをな。」

男の一人が、カイに突っ込んだ。

カイは、いつもなら戦うが、今回は手が出なかつた。
いや、出せずについた。

次々とボロボロになる体を抑えながら、カイは男達を見た。
「どうした鬼澤？日本で一番強い極道のトップも、手出し出来ねえ
のか？」

男は笑いながら言った。

「おい、工藤。まだ殺すなよ。」

奥にいた男が工藤に言った。

「ああ、分かつてゐるよ。まだ苦しんでもらひつからな。」

カイを蹴りつけた。

倒れるカイ。奥にいた男が、ゆっくり近づいた。

カイの髪をつかみ、顔を上げた。

「鬼澤、オレを覚えてないか？」

カイは、男をじっと見た。

「お前、まさか岡部か？」

カイは驚いた。

「気づいたようだな。オレは、お前のせいで家も兄弟もなくし、悲
惨な人生を送つた。

てめえに分かるか？住む所も行く場所も、頼る奴もない孤独な人
生を…お前にも、味わつてもらうぞ。」

カイの頭を、地面に何度もぶつけた。

口からも血を出し、カイはフラフラになっていた。

「カイ兄！」

突然、後輩達やリョウ達が来た。

「なんだ邪魔が入つたな。」

みんなはカイを守るために、カイを後ろにした。

「てめえら誰だよ？」

ワタルは、睨みつけた。

「今日の所は、引いてやる。だが、これで終わつたと思うなよ。鬼

澤…」

岡部達は、笑いながら去つて行つた。

みんなはカイに近づいたが、傷が深くカイは氣絶していた。

急いで、青龍会のもとに行き、傷の手当てをした。

「一体何があつたんだよ。カイ兄が、ここまでやられるなんて…」
寝ているカイを、心配しつゝ疑問に思った。

カイは静かに起きた。

「オレ…」

まだ、傷が癒えず所々痛かった。

「カイ兄何があつたの？あいつら、誰だよ。」

ホクトが言つと、カイは真剣な顔をして、黙つた。

みんなは、不思議に思い、けどそれ以上は聞かなかつた。

「若！」

突然、小早川が入つて來た。

「若、大変です。何者かが駅を爆破させたもようです。」

カイは、驚き家を飛び出した。

「カイ兄！」

みんなの呼びかけにも答えず行つた。

「とにかく、オレ達も行こう。」

みんなもカイを追いかけた。

駅に着くと、今は消火されてるが次々にけが人が運ばれて行つた。

「ひでえ。」

周りは、けが人や警察、消防士の人であふれていた。

「くそ……」

カイは、地面を殴ると悔しがり、また一人で去つて行つた。

みんなは、一旦カイの家に行つた。

「カイ兄。何があつたのかな？」
みんな心配していた。

「今言える事は、オレ達の周りが何者かに狙われているって事じゃないか？」

たゞけは、薄々感じていた。

「私たちも、今は何もわかりません。とにかく、安全な場所にいてください。」

小早川の提案で、みんなはカイの家に、しばらく泊まる事にした。

夜になつても、カイは帰らなかつた。

リオは起きて待つていた。

「リイ姉。」

リオが振り向くと、ワタルが起きてきた。

「まだ、カイ兄帰らないの？」
ワタルも心配でいたみたいだ。

「そのうち帰つて来るよ。」

ワタルに、水を差し出し笑つた。

しばらく、ワタルはリオを見ると、

「リイ姉つてさ、カイ兄が好きなの？」
突然の質問にリオはせき込んだ。

「バカ。急に聞かないでよ。」「
わかりやすい態度だ。」

「カイは、大切な人よ。カイといふとさ、落ち着くし楽しいしね。バカだけど…でも、人の痛みをわかつてくれて、いつも、助けてくれる。ヒーローみたいな人だよ。」

リオは、につこり笑つた。

(「の二人、素直になればいいのに…）ワタルは、そう思った。

「さ、早く寝なさい。明日、早くから出掛けるよ。」
ワタルに言つと、リオも部屋に行つた。

こうして、長い1日が終わつた。

次の日。朝から、青龍会とともにに出掛けたみんなは、カイの事が心配だつた。

「カイ兄。どうしたんだろ？」「

ワタルは、心配しながら車のテレビをつけた。

「臨時ニュースです。また、テロが起きました。先ほど、商店街で、事件は発生し、けが人などが多数いるようです。」
ニュースを見ると、もしかしたらカイが来るかもしれないと思い、みんなは商店街に行つた。

現地に着くと、また警察や消防士の方々がいた。

リオは、横を見ると、カイを見つけた。

「カイ！？」

呼びかけ、みんなはカイの元に走つた。

「いつたい、何してたんだよ。」

タカシの質問には答えず、カイは黙つていた。

救急車が横を過ぎた。

「アキラ～～！」

母親の鳴き声が聞こえ、小さな少年が運びこまれて行つた。
カイは、黙つて見ていた。

「ちくしょう。何でオレ達の周りの奴が狙われているんだよ。オレ
達が何をしたんだよ」
シノブは、拳を握りしめた。

カイも目をそらし、

「ゴメン。」

そう言つてまた走つて行つた。

「カイ」

リオは呼び止めたが、止まらなかつた。

また、カイがいなくなり青龍会の事務所では、みんなが集まつてい
た。

一方、その頃カイは川沿いを歩いていた。
先ほどのシノブの言葉を思い出していた。

（なぜ、こんな事になつたのは…青龍会に…鬼澤カイに関わつたか
ら。）
カイは一人で考えていた。

何も感じず、ひたすら歩いた。

青龍会の事務所ではみんながカイの事を話していた。

「カイ兄。帰ってきた。」

シノブが走つて來た。

急いで、玄関に行くと、みんなは息を飲んだ。
いつもの明るいカイじゃなかつたからだ。寂しい目をして、みんな
黙つた。

「ゴメン。少し眠る。」

カイは、そう言つて部屋に行つた。

しばらく、みんなはそのままにしておく事にした。

夕方になり、カイは眠らず部屋にいた。
奥の台所で話声が聞こえ、カイは向かつた。
台所では、みんなが夕飯の支度をしていた。

「あつ！カイ兄。起きた？今から夕飯だよ。
明るくシノブは言つた。

「すまん。オレは…」

カイが言いかけると、リオは

「私が作ったのに食べないの？」

そう言つて、睨んだ。

カイは、少しだけならと言い、席についた。
みんなは、カイを励まそつと普通にしていた。

いつものように賑やかな時間だった。
しかし、カイはまだ浮かない顔をしていた。

「カイ兄。食べなよ。うまいぜ。さすがリイ姉だね。
ワタルは、むじじゃきに言った。

「おだてても、何も出ないよ。」

リオも笑顔で言った。

カイは、少し残すと箸を置いた。

「ゴメン。やっぱりいい。」

そう言つて、また部屋に戻るのとした。

「カイ、無理しないでいいからさ。」

リオはカイに呟いた。

「カイ兄。オレ達、カイ兄が言つまで待つよ。」

ワタルも、笑顔で言った。

ふと振り向くと、みんな笑顔のままで見ていた。

「とにかくさ、今は一緒にご飯食べようよ。悩みなんかさ、みんな
で分かち合えば、小さくなるよ。ね？」

リオの言葉にカイは、黙つた。

静かに席に座ると、

「話すよ。全部。」

そう言つて、今までの事を語り始めた。岡部達の事を全部。

「今回のテロ事件の犯人は、岡部という奴だ。」

カイが話したとたん。リョウやタカシが驚いた。

「岡部つて、あの岡部か？」

リョウとタカシは知つてゐみたいだ。

「ああ、岡部とオレ達は小学校の時に一緒にいたんだ。それが、何
らかの原因で別れた。岡部は、あの極道大戦争の被害者だ。」

みんなは静かに聞いた。

「あの日、オレは青龍会の跡継ぎとして現場にいた。しかし、あまり乗り気はなかつた。でも、跡継ぎとしての自覚が目覚めて行つたんだ。あまり覚えてないけど、気が付いたら、戦争は終わっていた。」

カイが話すと、奥から小早川が来た。

「あの時、誰もが戦争を終わる事を願つていた。けど、いつの間にか火がついた戦争は、力を増して行つた。その時に、若が止めたんだ。次々と人を倒して、青龍会の奴も関係なく全員倒した後、立つていたのは若だけだつた。」

カイは強く拳を握りしめた。

「オレが気が付いた時には、周りにけが人だらけだつた。お前らも見た事あるだろ？ オレは、切れたら自分でもわからなくなるほど、暴れてしまうんだ。」

そのせいで、岡部をあんな犯罪者にして…」

カイは、涙を浮かべた。

みんなは黙つていた。

ふと、リョウが口を開いた。

「小さいな。」

意外な言葉に、みんなリョウを見た。

「お前が何をしたんだよ。お前は、戦争を止めたんだろ？ 例え、意識がなくても、みんなが願つていた事を叶えたんだ。堂々としろよ。」

それとさ…一人で考えるなよ。オレ達もいるじゃん。お前は、一人じゃないんだぞ。」

リョウはにつこり笑つた。

「でも、オレのせいで学校も駅も商店街も…小さな子供だって傷ついているんだぞ?」

カイは泣きそうな声を出した。

「そんな、一人で悩むなよ。オレ達仲間だろ? 分かち合えればいいじゃん。」

カイは涙を流した。

「カイ兄。泣いているの?」

ワタルは、聞いた。

「泣いてねえよ」

カイは、強がつたが涙は流した。
仲間との絆を確かめて…

「オレ、戦うよ。もう、弱くならない。あいつらと戦うよ。」

そう言って、決意した。

だが、まだこれだけでは悲劇は終わらなかつた。

「よし、じゃあさつそく作戦を立てるか?」

カイは、すっかり元気になつた。

「まず、岡部達は必ずオレの周りに現れる。最初に学校。次に駅。そして商店街と、いつもオレが行く所を狙つてる。

しかしここは、青龍会の事務所という事もあり、あいつらは狙わない。また大戦争になりかねんからな。次に狙うのは、ここだと思う。

カイは、地図を広げ指差した。そこは、たゞけのジムだった。
「ここは、オレ達が出入りが多い場所だからな。何としても食い止めねえだい。」

そう言つて、ジムの周りを見張った。

夜になり、何も起こらなかつた。

「来ないね。」

さすがに、朝から見張つて疲れも出てきた。
今日の所は家に戻つて、また明日来る事にした。

家に着くと、カイのケータイに電話が来た。

「非通知つて誰だよ。」

カイが取ると、声の主は岡部だった。

「見張りをつけても無駄だぜ。」

その一言を聞き、カイ達は急いでジムに戻つた。

ついでにまでは、何も変わらなかつたジムが燃え上がつていた。

「ウソだろ？」

たゞけは愕然として、その場に崩れた。

カイは悔しさで、何も言えなかつた。

幸い、誰もけが人はいなく、火もすぐに消えたが、全焼した。

家に戻り、誰も話をしなかつた。

たゞけゝは、一人外にいた。その様子を見て、カイは声をかけた。

「ゴメン。オレがもつと注意していれば……」

カイは、下を向いた。

「カイ兄。お願いがあるんだけど…
オレに格闘技教えてくれないか？」

たゞけゝは、後ろを向いたまま言つた。

「お前らは、強くなくてもオレが守つてやるよ。」

カイはたゞけゝに近づいたが、伸ばした手をふりほどかれた。

「守られてばかりじゃイヤなんだよ。」

たゞけゝは、突然大きな声を出した。

カイは、驚いた。

たゞけゝの肩が震えているからだ。

「カイ兄。オレ達もさ、戦うよ。一緒にやるよ。」

後ろを向くと、みんながいた。

カイは少し黙り込み、

「わかった。だが、無理はするなよ。」

次の日から、みんなは小早川ら青龍会の人達のもと、空手やボクシングや柔道など、教えてもらつた。

カイは心配しつつ、見守つた。

「カイ兄。」

汗だくでカイの前に来たワタル。

「どんどん上達していくなあ
カイは笑顔で言った。

「当たり前じゃん。絶対に次は、食い止めるよ。」
ワタルは拳を握りしめ決意した。

そんなワタルを見て、カイは微笑んだ。

「カイ兄…オレ、カイ兄の事好きだよ。何かさ、オレ一人っ子だからかもしれないけどさ…カイ兄の事、本当の兄貴だと思つてる。
優しくて、強くて、いつもオレ達の味方になつてくれてさ。何か…
ヒーローみたいだよ。少しバカだけど。

だからさ、カイ兄を今度は守るからさ。あまり、無理しないでね」
少し照れながらワタルは言った。

カイは、感動してワタルに抱き付こうとしたが、カイを避けワタル
は、

「よつしや、また頑張るかあ

そう言つて、また修行しに行つた。

一週間が過ぎ、どんどん街は、岡部達に壊されて行つた。

「くそ…一体どこにいやがんだよ。」

カイはニュースを見るたんびに、悔しさが増した。

その夜。

みんなが寝静まつた頃、カイは1人家の外にいた。

(まだ、止められない。このままじゃ、また大戦争みたいな事になる。ここは、早めに食い止めなければ…)
1人で考えていた。

「な、一人で青春してんの?」「パジャマ姿で来たのはリオだつた。

「カイ、キレイだね。星…」

カイは言われた途端に、空を見た。

「不思議だよね。今も、この街で大変な事になつてることで、星は光つてるんだよ。」

リオの話声を聞きながら、空を見ると、キレイな星が、見えていた。

「そうだな。」

カイは、少しどキドキした。

「カイ、頑張つてね。でも、死なないでよ。」

リオを見ると、少し涙目になつていた。

「あのさ…もし、この事件が終わつたら…オレ、お前に話したい事があるんだ。」

リオは、真面目な顔で見てるカイを見た。

「オレ…と、その…一緒に…」

カイは顔を赤くしながら、リオと見つめあつた。
だんだんと、二人の顔は近づいた。

手が触れかかつた瞬間。

「バカ押すなよ。」

その声とともに、みんなが、現れた。

「てめえら、いつから…」

カイとリオは、とうに離れた。

「リョウもタカシも一緒に…」

リョウとタカシは、隠れていたが、カイにはバレていた。

「つたく…」

カイは、立ち上がり見た。

「正直になりなよ。」

シノブやワタルは、にやけながら言った。

「この野郎」

カイは一人を追いかけ走った。

こんな幸せが、いつまでも続くような事はなかつた。

第1-1話 愛してゐるもの

「氣をつけるよ」

リオとワタルは、買い物に行こうと支度をしていった。

カイは、岡部達がどつかにいるかもしれないからって、ついて行こうとしたが、

「あれから一週間たつても、姿を見せないんだよ？ 平氣だよ」

ワタルの言葉に、カイは安心した。

後輩達も、小早川らのおかげで、多少は強くなつた。

岡部達も、最近では活動していないらしく、あまり事件は起こらなかつた。

「じゃあ、何かあれば電話して来いよ。」

カイは、リオとワタルに手を振り見送つた。

しかし、夜になり辺りは暗くなつても一人は帰つて来なかつた。

「ワタル達はまだか？」

リヨウは、カイに聞いた。

「ああ…」

だんだんと、時間だけが過ぎていつた。

ひとまず、後輩達は修行で疲れているために、家に残りカイとリヨウとタカシは、近所を探しに行つた。

カイは、探してゐる内に胸騒ぎがして、手が震えた。

「どこにいるんだよ…」

カイは街の中を探した。

突然ケータイが鳴り響き、着信を見る限りオのケータイからだった。

「もしもし？お前り、どこまで…」

カイは言いかけたが、すぐにリオじゃないって気付いた。

「お前…」

電話の声は岡部だった。

「よお。久しぶりだな。」

「リオ達をどうした？」

カイは街の中で叫んだ。

「そんなに、大切な奴らか？少し、遊ばせてもらつたよ。」

電話から、岡部の笑い声が響いた。

「どこに行つた？」

カイは、手が震えるのを感じた。

「オレは言つたはずだぞ？」

お前にも同じ苦しみを味わせてやるつてな。

そんなに大事なら、ヒントは羽だ。」

岡部は、高らかに笑い電話を切つた。

「くそ…」

カイは、すぐさま、リョウやタカシ、また後輩達や青龍会に連絡して探し出した。

一時間が過ぎ、全然見つからなかつた。

ひとまず、公園に集まつた。

「いたか？」

カイは、息を切らしながら聞いた。

しかし、誰も何一つ情報はなかつた。

「くそ… オレのせいだ。あの時、安心しなければ… オレがついて行つてれば…」

カイは、悔しくて木を殴つた。

突然、風が吹いた。

「これ…」

どつからか、黒い羽が舞つてきた。

カイは岡部の言葉を思い出した。

「ヒントは羽…」

カイは、まさかと思い、公園を見渡した。

「カイ兄、あれ…」

シノブが指差した先を見ると、一つの部屋みたいな場所があり、その上には箱があり、その中から羽が出てきていた。

ゆっくり近づくと、風で部屋のドアが開いた。
一瞬時が止まつた。

誰もが、目に写つたものに驚いた。

中から倒れるよつに出てきたのは、血まみれになつたワタルだつた。

カイは、ゆつくつと近づくと、ワタルを抱きしめ

「ウソだろ？ ワタル〜！！」

泣きながら名前を呼んでも、ワタルは反応しなかつた。

「おい…行くぞ。」

リョウは、少し涙をため拳を握りしめた。

リョウの言葉に、みんなは後に続いた。

しかし、カイは動かなかつた。

「カイ！！」

タカシはカイを見た。

「お前…何してんだよ。もう待ってらんねえ。こいつから、見つけ出して、ぶつ殺すぞ。」

タカシは叫んだが、カイは、黙つたままだつた。

小早川は、ワタルの首筋に指を当てるとい

「まだ微かですが、脈はあります。」

急いで、ワタルを連れて病院に行つた。

すぐさま手術が始まり、カイ達は廊下にいた。

カイは、椅子に座りながら下を向いていた。

「お前…何してんだよ。何で、死にそうな顔してなんだよカイ…」

リョウは、カイを無理矢理立たせた。

しかし、まだ反応はなかつた。

「さつさと、ワタルの仇打ちに行くぞ。」

みんなは、歩き出しだが、カイは動かなかつた。

「 もういいよ……」

みんなは、耳を疑つた。

「 何だよ。もういいって……」

リョウは、カイに近づいた。

「 もう無理だよ。さすがのオレも、お手上げ。もう、疲れたよ……」
カイは、そう言つて、また座つた。

「 何言つてるんだよ。食い止めなればいけないじゃんかよ。
まだ、リオも見つかっていないんだぞ？」

ここで、じつとしてるつもりかよ。カイ……」
タカシは、カイを見たがそれ以上は言えなかつた。

死んだような目をしているからだ。

「 もう、無理だ」

カイは、そう言つて病院からでて行つた。

「 カイ兄……」

たゞけは、静かに出て行くカイを見ていた。

リョウが持つっていたカイのケータイが、突然鳴つた。

岡部達だ。

「 明日の正午ちょうどに、港の廃工場に来い。」

「リオは…どこに行つた。」

リョウは、聞いた。

「女は、ここにいる。最終決戦と行こうぜ。」

岡部は、そう言って電話を切つた。

「明日、正午ちょうどに廃工場に来つて…

最終決戦だそうだ。」

リョウは、みんなに説明した。

「リイ姉は？」

シノブは聞いた。

「そこにいるみたいだ。」

「じゃあ、生きてるんだね。早く、カイ兄に知らせなきゃ…」
シノブは、カイに知らせようとしたが、リョウに止められた。

「カイは、今は無理だ…」

リョウは、それ以上何も言わずに去つて行つた。

そして、次の日。

言われたとおりに廃工場に來た。

「行くぞ。」

でかい扉を開き、中に入つた。

奥に、5人はいた。

「やはり、鬼澤は来ないか…」

岡部は、うつすら笑つて見た。

「みんな…」

岡部の横には、縄で縛られているリオがいた。

「てめえらの好きにはさせねえ。」

リョウ達は、構えた。

「いいだろ。てめえら、好きに暴れていいぞ。何なら殺してもいい。」

そして、決戦は始まった。

その頃、カイは家の部屋の中にいた。
相変わらず、死んだような目をしていた。

「若…」

小早川は、部屋に入りカイを見た。

「たった今、入った情報によると、港の廃工場で岡部達と、皆さん
が対立始めたようです。」

小早川の言葉にも、カイは反応しなかった。

リョウ達は、激しい攻防戦をしていた。

「少しほ、やるじやねえか…しかし、やはりガキだな。
みるみるうちに、全員傷だらけになつていつた。」

「強い…」

ホクトは、傷だらけの体を支えた。

「バカな奴らだな。あんな奴に、騙されて痛い目にあつてよ。」
リョウは、腹を蹴られ飛ばされた。

みんな、ボロボロになりながらも立ち上がった。

「たしかにバカだよな。あいつはよ…

何でも、一人で抱えこんでよ。あいつは、いつも一人で、でかいものを背負って生きてんだ。

だけど、一度も逃げ出した事はない。」

タカシは、岡部を睨みつけながら言った。

「じゃあ、今はどんなんだよ。たった一人も守れず、仲間を苦しめ…
そんな奴が、どこにいるんだよ。」

男は、タカシを殴った。

「あいつは、何も悪い事はしていない。オレ達は、今まで守られて來たんだ。

だから、今度はオレ達が守るんだ。

オレ達は、絶対に負けない。」

リョウは、岡部に突っ込んだ。

「甘いんだよ」

しかし、逆に殴られまた飛ばされた。

みんな次々に、やられていった。

「入るぞ」

カイのおじいちゃんが部屋に入ってきた。

「そんなに辛かつたか？ワタルが、やられたのが…」
カイに話しかけたが、何も答えなかつた。

「少し、昔話をしよう。

昔な、一人の男がいた。その男は、ケンカが強くてな、いろんな強敵と戦つては勝つて、強さを増し、この日本で最強と呼ばれていた。誰も勝てるものはいなくて、男は強さに酔いしれていた。
敵はいなくて、男は強さで、支配して、結婚相手も無理矢理見つけた。

そんなんある日、男の妻がが自殺した。

理由は、愛が感じられなかつたから…

男は初めて泣いた。いくら強くても、いくら最強と呼ばれても、目の前にいた一人を守れなかつたからだ。

初めは、愛なんか感じなかつたが、いつの間にか愛していくんだな。
男に残された物は、妻との間に産まれた我が子だけだつたんだ。」
おじいちゃんは、カイに、話した。

「…その後は？」

カイは、下を向きながら聞いた。

「我が子に愛を託したんだよ。」

おじいちゃんは、カイの頭を撫でながら言つた。

「お前は、まだ出来る。大切な孫が、そんな顔していたら、辛いじゃないかよ。」

おじいちゃんは、につこり笑つた。

「さあ、行け。大切な死ぬ氣で守れ。お前ならまだ間に合つ。そ

れど、ワタル君は、さつき、意識を取り戻したみたいだ。

そう言って、立ち上がり

「てめえら、青龍会の名にかけて、負けるんじゃねえぞ。」

カイが振り向くと、青龍会のみんなが、カイを待っていた。

その頃、廃工場では、すでに限界を超えていた。

「くそ…」

立ち上がる事も出来ないでいた。

「せつせつ、くたばつてしまえ。」

男は、シノブの顔を蹴った。

苦痛の叫びが響いた。

「しぶとい奴らだぜ。」

岡部は、刀を持ち、

「ひと思いに殺すか。」

ゆっくりと近づいた。

「そんなもの通用しないよ。」

リオは、岡部に言った。

「てめえ、オレがマジにやらねえと思つてるのか？試してみるか？」

岡部は、刀の先をリオに向けた。

「やめる。お前の相手はオレ達だろ。」

ホクトは、岡部に突っ込んだが、男に止められた。

みんな、動かないように男に捕まつた。

「てめえ、怖くないのか？まだ、鬼澤が助けに来るとでも思つてゐるのか？」

それは、無駄だぜ。目の前で大切な奴が、傷ついたからな。ショックで、あいつは一度と立ち上がれねえよ。」

高笑いした。

「確かに、あなたの言う事は本当かもしれない。私を殺すのもためらわず、やる。でも、それでも信じる。」

リオは岡部を睨んだ。

「ふん…じゃあ、かけてみるか？」

岡部は、リオの前で刀を振り上げた。

「やめろ！」

リョウは叫んだが、男に取り押さえられて、動けなかつた。

（くそ…早く来てよ。カイ兄）

（カイ…）

みんな、心の中で叫んだ。

「恨むなら、弱い奴を恨めよ。」

刀を振り下ろす瞬間、リオは叫んだ。

「カイ～！！」

周りが静かになつた。

「バカな…」

リオがゆつくりと目を開けると、岡部の刀は遠くにはじかれていた。

肩に、暖かい感触がする。

リオは、ゆっくり向くと
「よお、呼んだか？」

笑顔のカイがリオを抱きしめていた。

「カイ～！！」

リオは、泣きながらカイにしがみついた。

ゆっくりとリオを、離し

「向こうにいる。すぐに終わるからな。」

そう言って、男に向かった。

「バカな…一度と立ち上がりねえはずだ。」

男達は、カイに突っ込んだ。

「知ってるか？」

男達の攻撃を避けながら、カイは話した。

「人つてのはよ、大切なものを守るために、何度も立ち上がるんだ。」

男達を殴り飛ばし、みんなの前に立った。

「オレは、大切な仲間を守るために、地獄の底からでも立ち上がつてみせる。」

岡部達を睨みながら叫んだ。

「カイ兄…」

「つたく、遅いんだよ。」

みんなは、カイを見た。

「てめえら、離れてろ。こいつらは、オレがヤル。」

リョウ達は、青龍会に捕まりながら離れた。

「まあ、いい。ここで殺してやる。」

岡部達は、カイを囲んだ。

「カイ兄。何かおかしくない？」

シノブは、ふと言った。

みんなは、カイを見た。

「さつさとしようぜ。殺し合いんな。」

カイは突っ込んだ。

次々に男達は、カイに殴られ蹴られボロボロになった。

「こいつ…別人みたいだ。」

男は、肩をやられ抑えながら言った。

「こいつが、お前の本当の力か？」

岡部は笑みを浮かべながら、言った。

カイは、鬼澤家の血が騒ぎ出し、凶暴なカイになっていた。

「カイ…」

リオは、心配しながらみていた。

カイは、ニヤリと笑うと次々に男達をまた殴り続けた。

しばらくたち、岡部もボロボロになっていた。

他の4人はすでに、倒れて氣絶していた。

「バカな…オレ達は、死ぬ氣で強くてなったんだぞ。たかが、一人

の男に負けるわけがない。」

岡部は突っ込んだが、カイに頭を掴まれ、倒された。

上に乗り、カイは岡部を殴つた続けた。

「何か…ヤバくない？あのままじゃあ、カイ兄殺しちゃうよ。」
シノブは、青龍会に助けを求めたが、

「無理だ。あの状態の若は止められない。」

誰もが、カイを見た。

その時！

「そこまでだ！」

カイのおじいちゃんが現れ、カイに叫んだ。

「邪魔すんじゃねえよ。」

カイは、睨んだ。

「カイ」

「カイ兄。」

みんなは、カイに駆け寄った。

「もう、止めようよ。」

「こままじや、カイ兄がカイ兄じゃなくなるよ。」

シノブと、たゞけくは必死に止めた。

「カイ、戻ってきてよ。優しいカイに戻つてよ」
リオは、泣きながらカイを止めた。

「てめえら…」

カイの動きは止まり、ゆつくりとカイは、みんなを見て笑つた。

「すまん。もう大丈夫だよ」

いつものカイの口調になり、みんなは喜んだ。

しばらくして、警察が来て岡部達は捕まつた。

「ご協力ありがとうございました。」
警察が敬礼した。

カイは、ボロボロになつた体を見て、「ああ、また服がボロボロだよ」と言つた。

そんな様子を、みんなは見て、

「本当にすごいよな。」

カイを見て笑つた。

「カイ。」

リオは、カイに呼びかけた。

カイも、笑顔でリオに近づいた。

「カイ、ありがとう。お疲れ…」

一瞬の出来事だった。

捕まつたはずの岡部がリオを連れて、廃工場に入ったのだ。

「リオ～」

カイが追いかけた瞬間に工場は、燃え上がつた。

カイは青龍会のみんなに止められた。

「離せ。リオが…」

ますます、燃え上がる炎に、みんな愕然とした。

「急いで、消防車を…」

警察も慌てていた。

「離せよ。」

カイは、手をふりほどいた。

「待つてよ。カイ兄。いくらカイ兄でも、この炎じゃムリだよ。」

みんなは、カイを止めたが、カイは、ふとみんなを向き、

「オレが…オレが愛してるのは…リオだけなんだ。」

誰もが、止まつた。

その瞬間に、カイは炎の中へと行つた。

「カイ兄…カイ兄！」

たゞけの叫びは、届かず炎は勢いを増していった。

そして、すぐに、工場は崩れ落ちた。

カイとリオを残したまま…

第1-2話 世界で一番のヒーロー

真っ白な部屋の中でリオは目を覚ました。
どうやら、病室のベットの上みたいだ。

「私…」

しばらく、頭がぼ～つとした。
そばに置いてあるケータイが鳴った。

『起きたか？』

カイからのメールだ。

すぐに返信した。

『今気が付いたよ。カイ、大丈夫？』

『心配ないよ。みんなも大丈夫だよ。』リオは、安心した。
ドアが開き、みんなが入ってきた。

『リイ姉。大丈夫？』

シノブが、聞き、みんな集まつた。

『うん。何とかね。』

リオは笑顔で答えた。

話しによると、岡部に連れて行かれた時、何とかリオ達は助け出されて、3日間寝ていたようだ。

カイからのメールで、カイも大丈夫だと思いリオは安心した。

『リイ姉。傷もないし、明日には退院出来るみたいだよ。』

すっかり、よくなつたワタルが答えた。
あの事件から3日、いつもと変わらない日だった。

「そういうえば、カイの病室ってどこ?」
リオは、みんなに聞いた。

一瞬、間が空き

「今は…面会出来ないんだ。」

シノブは、後ろを向きながら言った。

多分まだ、傷が癒えてないんだなと思い、気にはしなかった。

次の日、リオとワタルは一緒に退院した。

カイとメールのやりとりをして、まだカイは退院出来ないみたいだ。
リオは、その日は家でおとなしく眠り、次の日に、カイの病室に行こうと思った。

『カイ、どこにいるの?』
カイにメールを送った。

『今は…オレは、いつでもリオのそばにいるよ。どんな時も…』
カイのメールを不思議に思いつつ、リオは寝た。

次の日、リオはカイの家に行つた。

そこに、みんなは集まっていた。

「ヤッホー。今からさ、カイの所に行くけど、みんなも行こうよ。
突然行つてカイを驚かそう。」
リオは明るく言った。

しかし、みんなの反応はなかつた。
重い空気が流れ、沈黙が続いた。

「リオ、お前にさ、話さなきゃいけない事がある。」
リョウは、真面目な顔になり話した。

「あの日、実はお前達を助けたのは、消防士の人じやなくて、カイなんだ。外に出てきた時は、もう…カイは、今でも意識が回復していないんだ。」

リオは話の意味がわからなかつた。

「ウソだよー。じゃあ病院に行つてみよつよ。」

みんなを連れて病院にでかけた。
長い廊下を歩き、着いた所でリオは驚いた。

そこには、色んな機械が体に付いてるカイが眠つていた。

「ウソ…だつて、メール来ていたんだよ。」

カイからのメールを見せた
みんなは、また下を向いた。

「信じられないかもしけないけど、カイはもう意識は回復しないんだつて。医者が言つていた。あの炎の煙りで脳がやられ、いつ死んでもおかしくなつて…

そのメールは、カイの思いが多分来たんだよ。」

タカシは泣きながら話した。

「ウソよ…」

リオは、田の前の現実を受け止められなかつた。

それから、一週間後。

まだカイは、意識は回復してなかつた。
リオもショックで、家から出て来なかつた。

突然ケー・タイが鳴り響き、リオが出ると
「リイ姉。カイ兄が…」

リオは病院に走つた。

カイの様態が急変したみたいだ。

病院に走つて、みんなと合流した。

「カイは？」

息を切らし、聞いた。

「まだ…」

まだ手術室から出てきてないみたいだ。
すると、扉が開き、先生が出てきた。

「カイは？」

リョウは、医者に近づいたが、医者は首を横に振り
「残念ですが…」
みんなは耳を疑つた。

全員中に入り見た。

機械が外され、眠るようなカイがいた。

「おい、冗談だろ？ カイ！！」

リョウは、近寄り体を揺すつたが、反応はなかつた。

「いやだ。カイー」

リオの鳴き声が響いた。

目の前の現実に、みんなは泣いた。

「くそ。」

タカシは、壁を殴りつけた。

「カイ兄…」

ワタルも泣きながら、カイを見た。

リオは、しばらく泣き、ゆっくり立ち上がってカイに近づいた。

「カイ…」

カイを見て、リオは微笑みを浮かべた。

「カイ… おはよう。早く起きなよ。みんな待ってるよ。」

リオはカイに語りかけたが、変わらなかつた。

「リオ… もうやめる。」

リョウは、リオを離そうとしたが、リオはリョウを拒んだ。

「カイ… 早く起きなよ。カイ？」

リョウは強く拳を握り

「やめるんだよ。リオ… カイは… もつ…」

リョウは、リオに叫んだがリオは聞かなかつた。

「早く起きないと、みんな待ってるよ。カイの好きな寝しよつよ…」

「リイ姉… もうい…」

たゞけゝは、泣きながら言った。

「早くしなきや、置いていくよ。カイの好きなお菓子だつてあるんだかられ…

みんなもいるよ。

たゞけゝも、ホクトも…」

みんなは、泣き続けた。

「シノブも、ほらワタルも元気になつたんだよ。トキもいるし、タカシやリョウだつている。みんな、カイが起きるのを待つてゐるよ。早く起きなよ。

私だつて…私だつているよ…」

リオの涙がカイの頬に落ちた。

「ほら、またみんなで、お酒飲んで、騒いでさ…またカイがバカやつちやうね？また、みんなで楽しく過ごしてさ…イヤな事とか忘れようよ。

みんな、じこにこるんだからせ…

だから…お願い…起きて…」

どんどんと、リオの声はかすれた。

リョウは、涙を流しながら、

「カイ…！」

叫び続けた。

「カイ兄」

「カイ兄！」

みんなも、カイの名前を呼んだ。

リオは、ゆつくりと深呼吸して

「カイ…お願い…起きて…

カイ…愛してゐ…」

カイの胸に顔をうずめた。

「…リオ？」

みんな、泣き声を止めた。
リオは、ゆっくりと顔を上げた。

「リオ…泣いてるのか？」「ううした？
辛い事でもあったのか？」

オレが守つてやるから…だから泣くな」
カイの手が、リオの涙を拭つた。

静かに首を横に振り、

「ううん。カイが…いる」とが幸せだからだよ。カイ…おはよ。」
リオは笑つた。

「ああ、おはよ。」

カイの言葉を聞いた瞬間に、みんな声をあげ喜んだ。

奇跡的にカイが生き返つた。

それから、1ヶ月後。カイは退院した。

「やつぱり、外だな。」

大量のお菓子を持ちながらカイは、病院をあとにした。

「つたく…普通退院した直後に、お菓子を買いくつかよ。」
リョウは呆れていた。

「まったく、カイ兄、生まれ変わつて来いよな。」

「たゞけくも、呆れていた。」

何はともあれ、カイは生き返り無事に退院出来た事が、みんなは嬉しそうみたいだった。

あれから、5ヶ月がたつた。

「よし、こんなものかな？」
カイは荷物をまとめていた。

「若…明日いよいよ出発ですか？」

小早川はカイに聞いた。

「ああ…明日は、みんなで見送りに来いよ。」
カイは、高校を辞めて前から決めていた、海外留学に行く事にした。
その事は、みんな知っている。

青龍会の人達も賛成した。

次の日。

空港には、みんな集まっていた。

「カイ、元気でね。ちゃんと電話はするよ！」
リオは、カイに言った。

「リイ姉。浮氣をしないように注意したほうがいいよ。」
後輩達は、2人をからかった。

「若、私に青龍会をお任せください。会長の名に恥じないよつ」、
しつかり守ります。」

小早川は、カイに決意した。

「ああ、オレがいな間頼むな。」

カイは小早川に言つと、隣にいたリョウやタカシも見た。

「あのさ、あそこに持つて行くのか?それ…」

リョウが指差した場所には、大量のお菓子が入つてゐる袋があつた。

「だつて…飛行機で食べたいからわ。」

カイは、笑顔で答えた。

「そろそろ行くか…」

カイが荷物を持ち、後輩達の前に行つた。

「しつかりやれよ。頼むぜ。」

そう笑顔で言つた。

「カイ兄じやないから平氣だよ。」

みんな笑顔で言つた。

「じゃあ行つてくる。」

カイは後ろを向き、歩いた。

しばらくカイの姿を見ていた。

「バカ…泣くなよ。」

たゞけは、シノブに言つた。

「そんなお前も…」

後輩達は、みんな泣いていた。

カイが、見えなくなりとするべく、

「カイ兄！」

ワタルが呼び止めた。

カイは、立ち止まつた。

「カイ兄！オレ、いつまでもカイ兄の弟でいるからね。」
ワタルは、涙を流しながら叫んだ。

ホクトも前に出てきて

「カイ兄。オレ、彼女を絶対に守つてみせるからね。」
次はシノブが出た。

「カイ兄。オレは、仲間を大切にするからね。」
トキも出た。

「カイ兄。今度は、みんなを守るように強くなるからね。」
たゞけも、出た。

「カイ兄。オレ、親父を絶対に超えて見せるからね。」
それぞれ、カイに約束した。

「頑張れよう！またな。」

そう言って、カイは旅立つて行つた。

「つたく…何してんだよ。アイツ…」

スーツ姿のリョウは、廊下にいた。

「まあまあ、そろそろ来るんじゃないかな？」

タカシは、言った。

三年の月日で、みんなは変わった。

たけは、ジムを継ぎオーナーとして、若い奴らを鍛えていた。ホクトは彼女とできちやつた結婚し、今は育児に奮闘中だ。シノブは、高校を卒業した途端に料理人になると言い出し、板前の見習いとして修行していた。ワタルは、夢だった海上保安官になるべく、勉強していた。

それぞれ、夢に向かつて過ごしてきた。
今日は、久しぶりに集まっていた。

「マジに遅いんだけど…誰の結婚式だつづーの。」
リョウはイライラ度MAXにきていた。

そんな時。

「ゴメンゴメン。」

カイが走つて来た。

「遅い。つーか、自分の結婚式ぐらい遅刻せずに来いよ。」

リョウはカイに怒鳴つた。

「とにかく、早く会場に行こい。」

タカシとリョウとカイは走つて、会場に行つた。

扉を開けると、懐かしいメンバーが揃つていた。

「本当に何も変わつてないなあ。カイ兄は。」

カイが、ゆつくつと前を見るとカイの結婚相手がいた。

「逃げ出したと思ったよ。」

カイは、その人を見ると驚いた。

「本当にリオか？」

リオは、キレイなドレスを着ていた。

「早くしなよ。あなた」

リオは笑いながら、カイに言つた。

そして、結婚式は無事に終りして、一次会が始まった。

「何はともあれ、ここまで来るのでに、いろいろあつたな。」
たゞけは、今までの事を思い出していた。

「本当だよ。」

後輩達はみんなカイを見た。

「バカで、子供っぽくてエロくて、そして、やつぱりバカだけど、
世界で一番のオレ達のヒーローだよ。」
ワタルは、カイを見た。

カイは、ケーキを持ちながら叫んだ。

「よつしゃ～。騒ぐぞ～。」

大切な仲間達とともに、いつまでも…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8961a/>

世界で一番のヒーロー

2010年12月8日18時32分発行